

訂校新撰國語讀本 卷六

4a
810
大10

41511

教科書文庫

4
810
41-1921
20000
67666

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



42
810
下10

資料室
日八月二十年十正大

濟定檢省部文

用科語國校學中

文學博士佐々政一編

大町芳衛
武島次郎
杉敏介
補修

訂校新撰國語讀本



株式會社
明治書院

訂校新撰國語讀本 卷六目次

- 一 田園雜興……………一
- 二 秋の歌……………七
- 三 病中の作……………一一
- 四 秋夜二題……………一九
 - 一、秋の月……………一九
 - 二、江心夜泊……………一九
- 五 東大寺……………二三
- 六 木曾の最後……………二七

目次

(一) 第一章 (天ノ子) 志用
 (二) 第二章 (大ノ石) 志用
 (三) 第三章 (新撰) 志用
 (四) 第四章 (新撰) 志用
 (五) 第五章 (新撰) 志用
 (六) 第六章 (新撰) 志用
 (七) 第七章 (新撰) 志用
 (八) 第八章 (新撰) 志用
 (九) 第九章 (新撰) 志用
 (十) 第十章 (新撰) 志用
 (十一) 第十一章 (新撰) 志用
 (十二) 第十二章 (新撰) 志用
 (十三) 第十三章 (新撰) 志用
 (十四) 第十四章 (新撰) 志用
 (十五) 第十五章 (新撰) 志用
 (十六) 第十六章 (新撰) 志用
 (十七) 第十七章 (新撰) 志用
 (十八) 第十八章 (新撰) 志用
 (十九) 第十九章 (新撰) 志用
 (二十) 第二十章 (新撰) 志用

株式會社

(四)

第七号

助動詞の意味

(由)係統

(由)普通

普通又ア候又
古ス

河内

〇七	山中鹿之助畫像題言	在有り	三五
〇八	伊藤公を誅ぶ	在有り	三九
九	知己難	在有り	四三
一〇	山 藜	在有り	四八
一一	白河殿の夜討	在有り	五七
一二	白峯の陵	在有り	六七
一三	俊 寛	在有り	七一
一四	わが家の富	以上	七八
一五	俚諺論	以上	八二
一六	修辭上の轉義	以上	八八
一七	芭蕉と蕪村との句		九七

一八	風雅論		九九
一九	ヴェニス商人上	(自習)	一〇五
二〇	ヴェニス商人中	(自習)	一一〇
二一	ヴェニス商人下	(自習)	一二六
二二	如意輪堂		一二一
二三	戦争の結果	日蓮上人	一二七
二四	日蓮上人	日蓮上人	一三五
二五	櫻 評	日蓮上人	一三九

櫻評

櫻評

如意輪堂

修辭上轉義

芭蕉と蕪村との句

卷六目次終

卷

卷六目次

卷六目次終

目次終

新撰國

廣島市
広島市

卷六目次終

校訂新撰國語讀本卷六

一 田園雜興

みづから世を避けて門を鎖すとはあらねど片田舎に住めば來り訪ふ者おのづから稀なり。東京の西郊、花園神社の傍、市街をはなれて一字の茅屋立てり。屋外凡そ千坪、前に葡萄棚あり、後に竹林あり、梅や、櫻や、柿や、栗や、松や、檜や、椿や、楓や、無花果や、百日紅や、其の間に簇生す。四顧ただ木立を見て人家を見ず。環堵蕭然、何となく我が心に適する處なり。

われ年來病軀を抱けり。我が志を伸さむには、まづ我が體の健康を復せざるべからず。西郊の地、空氣新鮮にして、街上の塵埃到り及ばず。管に我が心に適するのみならず、亦我が體に適するを以て居をここに定めぬ。都門より歸り來れば、滿園の綠樹笑つて我を迎ふ。穉兒飛來りてわが手の風呂敷包に取纏る。例として土産の菓子あらむことを期するなり。さるにても、わが志業未だ緒に就かざるに、早くも三人の子の父となりぬること愧かしけれ。

蒸暑き夏の夕、涼臺を無花果樹下に移して、一家晚餐に團欒すれば、竹葉そよぎて涼氣自ら盤上に遊る。ひと鉢の飯、母と分ち、妻子と分ち、庭の雞と分ち、池の鯉と分つ。今ひとつ、一

匹の犬いつも食時を違へず來りてかしまる。これ近鄰の家の飼へるものなり。その主人、近頃、妻子を残して病死せり。喪家の狗の警思ひ出されてあはれなるままに、殘肴を投與ふるを常とすれど、貧家の厨、魚なきこと多し。馬鈴薯など與ふるに、ただ鼻先にかきたるのみにて、悄然として立去ること氣の毒なれ。

一泓の池水、二閒四方に足らざるばかりなれど、清水湧出でて、流れて田にそそぐ。もとは朽木、中に満ちて、蛙やあもりの棲處となり、岸には雜草生ひ茂りて見るかげもなかりしが、草を芟り、朽木をとりのけ、あもりを捕へ、出すこと七八十に及び、水はじめて澄みて鑑むべくなりぬ。池邊に立ちて眺

むるに、蛙、あもりのみと思の外、長さ一尺ばかりの鯉魚ありて遊びめぐり、人の足音聞きては穴深くひそみゆく。大兒と中兒とこれを見て興がり、今少し鯉を入れよといふままに、十尾入れ、二十尾入れ、三十尾入れ、終に大小七八十の多きに及べり。白や、緋や、黒や、碧水に一種の模様を畫き、或は集まり、或は散じ、時には水面に唵喁し、時には空に躍る。かたばかりの欄干ある獨木橋上に立ちて、これを眺め、これに餌をやること、兒にとりてはこの上もなきなぐさみなり。

おぼつかなげに、「とと」と呼びて、雞に餌を與ふること、亦小兒がなぐさみの一つなり。家の四方に散在せる雞、この聲を聞きて喜んで來り集まり、先を争うて食ふ。雄三羽、雌

七羽ばかりあり。種類も一ならず。就中しやもの雌一羽、最も慍悍なり。餌を食ること最も甚しく、近よるものの頭を嘴にてつつくさま、如何にも憎さげにて、他の雞恐れて敢て近よらず。されど最も大いにして好き卵を生むものは、このしやもなり。

園中、兒を喜ばしむるものは梅の實なり、葡萄なり、柿なり、栗なり、無花果なり、筍なり、雞なり、鯉なり、蟬なり、蜻蛉なり。此等に對して兒は喜ぶ。喜ぶ兒を見れば、ただうれしきなり。慾もなし、名利の念もなし。沈思して自然に對すれば、はじめはその愛すべきを覺え、終にその敬すべきを覺ゆ。自然の奥には、何等かの神異のひそめるが如く思はる。而して小兒は人

(三) 親を思ふ心にま
さる親心、今日
のおとづれいか
に聞くらむ(吉
田松陰)
(四) 趙の武臣。

類の中にも、最も自然に近きものなり。よしや子を持つて未
だ親の恩は知らずとも、物のあはれは自ら知るべくや。
楽しき我が團欒にも、なほ一朵の愁雲たなびく。そは我が
胃腸の病なり。母や齡古稀に近し。憂愁苦楚の中に數十年を
送りて、われと相住むことも前後僅に十餘年に過ぎず。末年
われと相住みて小康を得たるは、なほ一年中の小春日和の
如きか。然るにわが病弱の身は、その小春日和をさへ時雨の
空に變ぜしめむとす。母は常に我が病身なるを氣づかひ、わ
が食少なきを心配す。親を思ふ心にまさる親ごころ。と詠じ
けむ。世に、子の病ばかり親の心を痛ましむるものなし。罪深
きかな。抑、不孝の子なるかな。昔は廉頗老いてなほ用ひられ

良夫
良夫
夫
宗貞

(三) (天)

(四) 良宗貞 (13)
11-1140)

むとして、強ひて健啖せりとかや。それは功名ゆゑ、われは親
ゆゑに、強ひて餐を加へ、久しく絶ち居りし晝食さへものす
るに至りぬ。食すすむやうになりてうれしとて、母の喜ぶさ
ま見るにつけても、覺えず涙ぐまれしこと幾度ぞや。

(天町桂月)

二 秋の歌

藤原敏行

秋來ぬと、目にはさやかに見えねども、
風の音にぞおどろかれぬる。

僧正遍昭

(一) 古今集撰者の一人。(四三三) 卷

在原元方
世中はいかに
ふるしとおも
ふらんこゝら
のひとにうら
みらるれば

(三) 大和國生駒川の
下流、南流して
大和川となる。

里はあれて人はふりにし宿なれや、
野原

庭もまがきも秋の野らなる。

紀貫之

川風の涼しくもあるか、うち寄する

二 浪とともにや秋は立つらむ。

在原元方
そやはいりて
あなはうら
みらるれば

年毎に紅葉ばながす龍田川、

紀貫之

(三) 古今集撰者の一人。(四三三) 卷

(三) 古今集撰者の一人。(四三三) 卷

(三) 古今集時代の人。

川下流が
みなとや秋のとまりなるらむ。

凡河内躬恆

かくばかり惜しと思ふ夜を徒に

寝てあかすらむ人さへぞ憂き。

壬生忠岑

かみなびのみ室の山を秋ゆけば、

錦たちきる心地こそすれ。

大江千里

月見れば千ぢにもものこそ悲しけれ、

わが身ひとつの秋にはあらねど、

植ゑし時花まちどほにありし菊、

二 秋の歌

九

色香ノアレル
うつろふ秋にあはむとや見し
（秋ノ氣候トスル）

読人しらす

昨日こそ早苗とりしか、いつのまに

稲葉そよぎて、秋風の吹く。

白雲に羽根うちかはしとぶ雁の

數さへ見ゆる秋の夜の月。

猿丸大夫

奥山に紅葉ふみわけなく鹿の

聲きくときぞ秋はかなしき。

ひぐらしの鳴く山里の夕暮は、

風より外に訪ふ人もなし。

三 病中の作

修善寺に居る間は、仰向に寝たまま、よく俳句を作つてはそれを日記の中に記入した。時時は面倒な漢詩さへ作つて見た。さうして、その漢詩も、一つ残らず、未定稿として日記の中に書きつけた。

余は、年來、俳句に疎くなりまされた者である。漢詩に至つては、殆ど當初からの門外漢と言つても可い。詩にせよ、句にせよ、病中に出来上つたものが、病中の本人に如何程得意であつても、それが専門家の眼に整つて、殊に現代的に整つて映るとは無縁思はない。けれども、余が病中に作り得た俳句と漢詩との價値は、余自身からいへば、全くその出来不出来

に關係しないのである。
健康の時

平生は如何に心持の好くない時でも、苟も塵事に堪へ得

るだけの健康をもつて居ると自信する以上、又もつて居る

と人から認められる以上、われは常住絶日夜共に生存競争裏

に立つ戦の人である。佛語で形容すれば、不斷に火宅の苦を

受けて、夢の中でさへ焦焦して居る。時には人から勧められ

ることもあり、偶には自ら進むこともあつて、不圖十七字を

列べて見たり、又は起承轉結の四句位は組合せないと、も限

らぬけれども、何時も何處かにスキマ隙があるやうな心持がし

て、限も残さず心を引包んで、詩と句との中に投入すること

は出来ない。

起承轉結(句)
起承轉結(句)
起承轉結(句)
起承轉結(句)
起承轉結(句)
起承轉結(句)
起承轉結(句)
起承轉結(句)
起承轉結(句)
起承轉結(句)

ところが病氣をすると、大分趣が違つて来る。病氣の時に

は、自分が一步現實の世を離れた氣になる。他人も亦自分を

一步社會から遠ざかつたやうに、大目に見てくれる。此方に

は一人前働かなくても濟むといふ安心が出来、彼方にも亦

一人前として取扱ふのが氣の毒だといふ遠慮がある。さう

して健康の時にはとても望めない長閑な春がその閒から

湧いて出る。この安らかな心が、即ちわが句わが詩である。従

つて、出來榮の如何はまづ措いて、出來たものを太平の記念

と見る當人には、それがどの位貴重だか分らない。

病中に得た句と詩とは、退屈を紛らすため閑に強ひられ

たものとは違ふ。實際生活の壓迫を逃れたわが心が、本來の

自由に跳返つて、むつちりとした餘裕を得た時、油然と漲り
 浮んだ天來の彩紋である。吾ともなく興の起るのが既に嬉
 しい。その興を捉へて横に咬み堅に砕いて、これを句なり、詩
 なりに仕上げる順序過程がまた嬉しい。漸く成つた曉には、
 形のない趣を判然と眼の前に創造したやうな心持がして、
 更に嬉しい。果してわが趣とわが形とに、眞の價值があるか
 或は無いかは顧みる違さへない。

病中は、知ると知らざるとを通じて、四方の同情者から懇
 切な見舞を受けた。衰弱の今の身では、その一一に一一の好
 意に背かない程の詳しい禮狀を出して、自分が死にもせず
 に今日に至つた経過を報ずる譯にも行かぬ。思ひ出す事な

私日記

本堂は十八期
の寒哉 漱石

どを牀上に書き始めたのは、これが爲である。銘銘に向けて
 言ひおくるべきものを、略して文藝欄の一隅に載せて、余の
 如き者の爲に時と心とを使はれた親切な人人に、わが近況
 を知らせる爲である。従つて、思ひ出す事などの中に詩や俳

句を挿むのは、詩人俳人としての余を見て貰ふ積りではな
 い。實をいへば、其の善悪などは寧ろどうでも可いとまで思
 つて居る。ただ、當時の余は斯の如き情調に支配されて生き
 て居たといふ消息が、一瞥の中に讀者の曾に傳はれば満足

なのである。

秋の江に打ちこむ杭の響かな。

これは、生きかへつてから十日許の後に、不圖出来た句である。澄渡る秋の空、廣き江、遠くよりする杭の響、この三つの事相に相應したやうな情調が、當時絶えずわが微かなる頭の中を徂徠した事は、未だに覚えて居る。

秋の空、淺黄に澄めり、杉に斧。

これも同じい心の耽溺を、他の言葉で言ひあらはしたものである。

別るるや、夢一筋の天の川。

何といふ意味か、その時も知らず、今でも分らないが、或は

人が面をかきしめん

松根氏、赤石の友人。

ほのかに東洋城と別れる折の連想が夢のやうに頭の中を這廻つて、恍惚として出来上つたものではないかと憶ふ。當時の余は、西洋の語に殆ど見當らぬ風流といふ趣をのみ愛してゐた。その風流のうちでも、茲に擧げた句に現れるやうな一種の趣だけを特に愛してゐた。

秋風や、唐紅の咽喉佛。

といふ句は、寧ろ實況ではあるが、何だか殺氣があつて、含蓄が足りなくて、口に浮んだ時から既に變な心持がした。

風流人未死。病裏領清閑。

日日山中事。朝朝見碧山。

詩に圈點のないのは、障子に紙が貼つてない様な貧弱な

平上云入
*平上云入
○
!!!
福脚

感じがするので、自分で丸を付けた。余の如き平仄もよく辨へず、韻脚ももうる覺えにしか覺えてゐないものが、何を苦しんで、支那人にだけしか利目のない工夫を敢てしたかと言ふと、實は自分にも分らないけれども、漢詩の趣は、王朝以後の傳習で、久しく日本化されて今日に至つたものだから、余位の年輩の日本人の頭からは、容易にこれを奪ひ去ることが出來ない。

余は平生事に追はれて簡易な俳句すら作らない。詩となると億劫で、なほ手を下さない。ただ、かやうに現實界を遠くに見て、杳な心に些の蟠りもない時だけ、句も自然に湧き、詩も興に乗じて種種な形のもとに浮んで來る。さうして後か

夏目漱石
容易
老死

ら顧みるとそれが余の生涯の中で一番幸福な時期なのである。(夏目漱石―切抜帖より)

四 秋夜二題

一、秋の月

月の夜は秋こそ勝れたれ。春の月の光は美しき童の髪のごとし。めてたきことは誠^{本多}にめてたし、なつかしきことも誠になつかし。されど猶いささか物足らぬ心地す。冬の月は水晶もて作れるものを見るが如し、きよらかさは餘ありて味なきに近し。夏の夜の月の團圓と大いなるが、海原の涯より、松の樹の閒より、又は市中の薨^{カカシ}の浪閒より出でたる、いづれ

も目さましく心ゆくものにて、夜の景色も快くをかしけれ
ど、ただ我が魂の世に浮かるるをこそ覺ゆれ、天地の靈氣の
身に浸入るやうなるを覺ゆることなし。

秋は夜おもしろく、夜は月おもしろし。中の秋の五日六日
の月のふと見る夕暮の空に出で居りて、雑木の梢もろこし
の垂葉などに風かすけく、囁く洗づおもしろし。遠山黒く
暮れて素月輝を揚げ、庭樹の闊葉、纖葉の葉表の照葉蔭の闇
おのがじし、畫趣をなし、詩情をつくりて、合して爽涼、清澄の
景を醸し出すさま、いづくにもありふれたることながら好
し。

夜更け蟲吟じて世の中靜なる時、たまたま燈前に書をさ

かすけし
かすけし
かすけし

秋

し置きて起つて廊を歩むちなみに、窗の白きを看て戸をお
し開きて出づれば、月天心を過ぎて、光華六合に張り、霜に澄
める夜の氣は水まささに凍らむと欲するが如くなる、身心頓
に此の世のものならずなりたるやうに覺えて、秋ならては
月ならてはと思はる。

二十日過ぎの月を曉に觀たる、亦好し。曉天夙く目覺め、ひ
とり外に出で井のもとに立寄る折柄、朝霧あさあさと罩め
て、星よわよわと消え残れる天のかなたに、秋とはいへど力
無き月を見たる、中中におもしろし。いささかの竹むら草む
らの根方などは、猶やや聞きにすがれの蟲の音かしまし
からず、淺黄に明けゆく空吹く風の冷かに、領に落つると

かすけし
かすけし
かすけし

へむ方なく宵涼しくおほゆ。

(大津川) (川中舟に泊る)

二、江心夜泊

舟三乗リテ

秋よし、夜よし、月よし。舟にしてこれを味ふ、最もよきやう

なり。大江露に更けて天地月に白む時、孤篷に身を埋めて隠

白クテユク時

洲の洲垂に泊れば流水すこしく、泔舸に激して船底に玉琴

流レル水

舟三乗リテ

の鳴るを聞くが如し。兩岸夢よりも淡くして、渚の葭の黒み

舟三乗リテ

薄ク

も楊の丸みも、ただ一様に一刷毛の墨、薄く暈され、人語と

世塵とすべて皆至らず、詩情と茶趣とただ雙びあるをかし

ニフトモ

さ、何とも言ふべくもあらず。寂として心頭の狀と眼前の景

世塵

寂

と共に融合せむとする時、余吾鷺のふはりと下りて、羽づく

ヨゴサ

ろひして、艫に寝たるなんと、江心夜泊の實を味ひたる人に

舟三乗リテ

望

して後、その趣を知るべきのみ。(幸田露伴「洗心録」)

舟三乗リテ

五 東大寺

月がよいので、東大寺のあたりへ出かける。すくすくと大

樹の立ちこめた境内の森には、月の光も流れかねて、陰森の

氣が煙のやうに迷うてゐる。このやうな宵に、木立の下路で

迷ひでもするものならば、きつと鬼の落した靈の係蹄にか

かつて、夜一夜歩き廻つたところて、いつかな路標を見つけ

ることも出来なからうと思はれる。

南大門は、撞木杖をついた翁のやうに支柱にもたれてそ

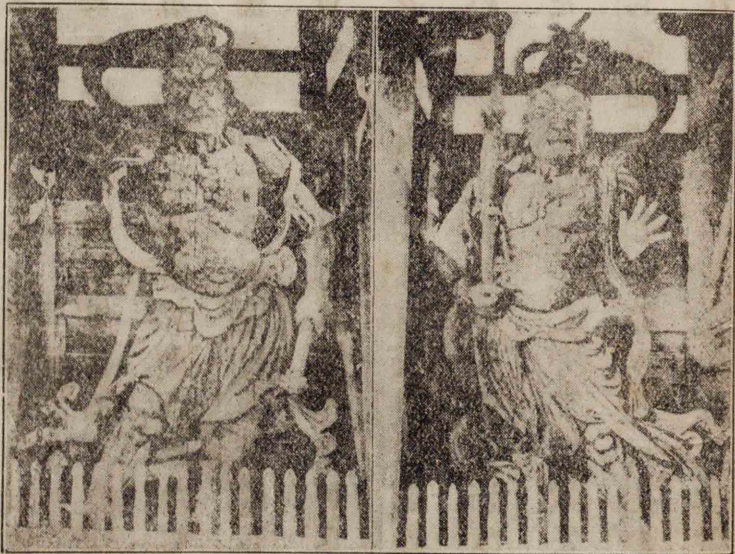
のすばらしい身體をちつと空に擡げて居る。密迹那羅延の

奈良市にあり。
聖武天皇の創建。
華嚴宗大本山。

オ、ソ、カ、ダ、
ヒ、フ、リ、ト、レ、キ、ル

二力士は、この静な宵にも、その三丈に餘らうといふ體を起して、胷肉を張り、寶杵を揮うて、張肘に控へてゐる。銀の滴のやうな月あかりが、盗むやうに窗にこぼれて、肩よりふくら脛にかけて、半身に流れる。肉むらの色がいかにも冷たく、また美しい。ちつと見てゐると、いかめしい顔のどこやらに追懷の夢心地が漂うて、靜に吐息をつくかのやうに思はれる。しかし、それもほんの一瞬の閒で、再び劫初オカキハツこのかた、寶杵を揮うて教法を護つてゐる金剛神の居丈高な姿に歸つてしまふ。

佛殿の中門は閉されてゐる。百閒にもとどかうといふ廻廊は、鳥の翼のやうに左右に開いて、はては見えずなる。門の



開金迹密 開金延羅承

このやうな静な夜を、ちつと佛殿の闇に閉籠つて、毘盧舍那

透閒からかいま見ると、金堂の扉は靜に閉ぢて、屈託さうな燈明が一つ瞬いてゐる。堂守の僧でもゐることか、どこやらに囁くやうな響がして、それもやがて消えてしまふと、あたりはもとの静寂になる。天人の足音も聞えさうな宵である。

(一) 永祿十年、松永久秀の兵火に罹る。

佛は何を觀じてゐられるであらう。永祿の昔、佛殿が炎上してより後、百三十餘の夏冬を、佛はいつも露宿でいらせられたといふ。その頃は夢のやうな月夜の静けさに、醉心地になるまでも見とれてゐられたであらう。どことも知らず十六夜薔薇のほふ卯月の宵に、春日野の木立より洩れる流し目のやうな月明に濡れながら、または佐保の川瀬に衣晒す女の唄も眠つた眞夜中、秋篠のあたりに沈み入る月影を眺めて、ひとり法界の久遠を想ひ、閻浮の世の流轉を觀ぜられた姿は、どれ程美しく、又偉大なものであつたか。今宵はそれらの追懷に、しみじみと寂寞の盃を味うてゐられるかも知れぬ。

(三) 大和國添上郡佐村。
(三) 同國生駒郡平城村の古名。

あたまの上で鐘が鳴る。九時ださうな。さびれた舊都の宵はもう夜半過の心持がする。(薄田泣菫一落葉)

六 木曾の最期

木曾は長阪を経て丹波路へとも聞ゆ。龍華越にかかつて又北國へとも聞えけり。かかりしかども、今井が行末の覺束なさに、取つて返して勢田の方へぞ落行き給ふ。

今井四郎兼平も八百餘騎にて勢田を固めたりけるが、五十騎許に打ちなされ、旗をば巻かせて持たせつつ、(主)の行方の覺束なさに都の方へ上る程に、大津の打出濱にて木曾殿に行逢ひ奉る。中一町許より互にそれと見知つて、主従駒を

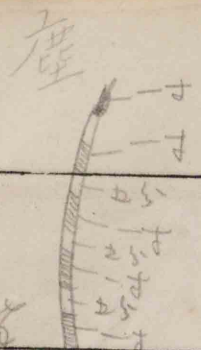
(六) 近江國滋賀郡大津の松本石場邊の古名。

(四) 山城國愛宕郡小野郷より丹波へ通ずる路。
(五) 同郡大原村より近江國滋賀郡龍華へ通ずる路。

早めて寄合うたり。木曾殿、今井が手を把つて宣ひけるは、義仲、六條河原にていかにもなるべかりしかども、汝が行方の覺東なさに多くの敵に後を見せて、これまで遁れたるはいかに。と宣へば、今井四郎、御誼、誠に忝く候。兼平も勢田にて討死仕るべう候ひしかども、御行方の覺東なさに、これまで遁れ參つて候。と申しければ、木曾殿、さては、契結集は未だ朽ちせざりけり。義仲が勢、山林に馳散つて、この邊にも控へたるらむぞ。汝が旗上げさせよ。と宣へば、卷いて持たせたる。今井が旗さし上げたり。これを見つけて、京より落つる勢ともなく、又勢田より參る者ともなく、馳集まつて、程なく三百騎許になり給ひぬ。木曾殿ななめならず悦びて、この勢にては、最後

の軍、一軍などかせざるべき。あれにしぐらうて見ゆるは誰が手やらむ。甲斐の一條次郎殿の御手とこそ承つて候へ。勢いか程あるらむ。六千餘騎と聞え候。さては、互によい敵、同じう死ぬるとも、大勢の中へかけ入り、よい敵に逢うてこそ討死をもせぬ。とて眞先にぞ進み給ふ。

木曾殿、その日の装束には、赤地の錦の直垂に、唐綾威の鎧著て、臙物作の太刀を佩き、鍬形打つたる冑の緒をしめ、二十四さいたる石打の矢の、その日の軍に射て、少少残つたるを頭高に負ひなし、重籐の弓の眞中取つて、聞ゆる木曾の鬼蘆毛といふ馬に、金覆輪の鞍を置いて乗つたりけるが、鎧ふんぱり立上り、大音聲を揚げて、日ごろは聞きけむものを、木曾



源朝

冠者。今は見るらむ。左馬頭兼伊豫守、朝日將軍源義仲ぞや。甲斐の一條次郎とこそきけ。義仲討つて兵衛佐に見せよ。や。とて喚いて驅く。一條次郎これを聞いて、唯今名告るは大將軍ぞや。餘すな者共、漏すな若黨、討てや。とて、大勢の中に取籠めて、われ討取らむとぞ進みける。木曾三百餘騎、六千餘騎が中へ驅けいり、豎様、横様、蜘蛛手、十文字にかけ破つて、後へつと出でたれば、五十騎許になりけり。

そこを破つて行く程に、土肥次郎實平、二千餘騎にて支へたり。そこをも破つて行く程に、あそこにては四五百騎、ここにては二三百騎、百四五十騎、百騎許が中をかけ破り、かけ破り行く程に、木曾殿今井四郎ただ主従二騎になりぬ。木曾殿

取
木曾殿

近江國流野郡
睦所村

近江國滋賀郡膳所村にあり。

「日頃は、何とも覺えぬ鎧が、今日は重うなつたるぞや」と宣へば、今井四郎申しけるは、御身も未だ勞れさせ給ひ候はず。御馬も弱り候はず。何に依つて一領の御著背長を、俄に重うは思し召され候べき。それは御身に續く勢が候はねば、臆病にてこそ、さは思し召し候らぬ。兼平一騎をば、餘の武者千騎と思し召し候べし。茲に射残したる矢七つ八つ候へば、暫く防矢仕り候はむ。あれに見え候は、粟津の松原と申し候。君はあの松の中へ入らせ給ひて、靜に御自害候へ。とて打つて行く程に、又、荒手の武者五十騎ばかり出てきたる。

兼平は、この御敵、暫く防ぎ參らせ候べし。君はあの松の中へ入らせ給へ。と申しければ、義仲、六條河原にていかにもな

るべかりしかども、汝と一緒にいかにもならむためにこそ、
 多くの敵に後を見せて、これまで遁れたんなり。處處にて討
 たれむより、一處にてこそ討死をもせめ」とて、馬の鼻を並べ
 て既に駆けむとし給へば、今井四郎、急ぎ馬より飛んで下り、
 注の馬の水づきクハ、左石手細ラツカス所に取付き、涙をはらはらと流して「弓矢取る
 身は年ごろ日ごろ如何なる高名さぶらふとも、最後に不覺
 しぬれば永き瑕にて候なり。御身も勞れさせ給ひ候ひぬ。御
 馬も弱つて候。いひがひなき人、郎等に組落されて討たれさ
 せ給ひ候ひなば、さしも日本國に鬼神と聞えさせ給ひつる
 木曾をば、何某が郎等の手にかけて討ち奉つたりなんど申
 されむこと口惜しかるべし。ただ理を枉げて、あの松の中へ

入らせ給へ」と申しければ、木曾殿「さらば」とて、唯一騎、粟津の
 松原へぞ駆け給ふ。
 今井四郎取つて返し、五十騎許が勢の中へかけ入り、鎧ふ
 んぱり立上り、大音聲を揚げて、遠からむ者は音にも聞け、近
 からむ人は目にも見給へ。木曾殿の乳母子に今井四郎兼平
 とて、生年三十三に罷りなる。さる者ありとは鎌倉殿までも
 知し召したるらむぞ、兼平討つて兵衛佐殿の御見參に入れ
 よや」とて、射残したる八筋の矢を、さしつめひきつめ散散に
 射る。死生は知らず、矢庭に敵八騎射落し、その後、太刀を抜い
 て斬つて廻るに、面を合する者ぞなき。ただ射取れや、射取れ
 とて、さしつめひきつめ散散に射けれども、鎧よければ裏か

かす、開閉を射ねば手も負はず。

木曾殿は、唯一騎、粟津の松原へ駆け給ふ。頃は正月二十一

日、入相ばかりの事なるに、薄氷は張つたりけり。深田ありと

も知らずして、馬をさつとうち入れたれば、馬の首も見えさ

りけり。煽れども煽れども、打てども打てども、動かさず、

しかども、今井が行方の覺束なさに、振仰ぎ給ふところを、相

模國の住人三浦の石田次郎爲久おつ懸り、よつ引いてひや

うと放つ。木曾殿、内胃を射させ、痛手なれば、青の眞向を馬の

頭におし當てて、うつぶし給ふ所を、石田が郎等二人落合ひ

て、既に御首をば賜はりけり。やがて、首をば太刀の鋒に貫き、

高く差上げ、大音聲を揚げて、「この日頃、日本國に鬼神と聞え

させ給ひつる木曾殿をば、三浦の石田次郎爲久が討ち奉つ
たるぞや」と名告りければ、今井四郎は軍しけるがこれを聞
いて、「今は誰を庇はむとて軍すべき。これ見給へ東國の殿原
日本一の剛の者の自害する手本よ」とて、太刀の鋒を口に含
み、馬より倒に飛落ち、貫かつてぞ失せにける。(平家物語)

七 山中鹿之助畫像題言

國破れて山河あり」と詠じけむ。あはれ、山陰・山陽の間に雄

視せし十一國の太守、僅に三代數十年にして亡びたるだに

遺憾やるかたなきに、螻蟻に等しき己が命の惜しさに、國を

賣り、君を賣り、恬として恥ぢざる佞人ばら、城を枕に國に殉

春望社申
國破山河在
城春草木深
感時花濺淚
恨別鳥驚心
烽火連三月
家書抵萬金
白頭搔更短
渾欲不勝簪

國破、河在、城
春草木深、(杜
甫)
烽火、連、三、月
家書、抵、萬、金
白頭、搔、更、短
渾欲、不、勝、簪
義久(勝久)
尼子經久、晴久、
義久(勝久)

川雲國常田の山の名。
何至下作「楚囚」相對位上耶。(晉書王導傳)

太史公「壽死」一語、
我忍「死」字、
至「此者、正爲」
趙氏一塊肉、
耳、今無「盡矣」
趙氏海死(宋史)

小記趙世家に出づ

ぜむとする死士をよそにして、むざむざと月山の金城湯池を敵に明けわたし、主君を天涯の楚囚となし、罪なくして、**ひ**とやの月を眺めしめたる、何等無限の痛恨ぞ。憎さも憎し、毛利の一族、君の仇なり、國の敵なり。出雲男子の玉の緒のあらむかぎり、俱に天を戴くべしや。は來れ、義を知る山陰の武夫よ。その折れたる太刀を磨け。その破れたる鎧をつくろへ。國既に亡びたれども、なほ奉ずべき主家の一塊肉存せるにあらざるや。七難八苦は、平生神に祈るところ。一死君の爲には何かあらむ。
ROBT 茅五郎團
滿腔の孤憤天地に横溢し、切齒扼腕一呼して起てば、毛利氏、爲に肝膽寒く、出雲の山河、爲に震動す。嗚呼、壯なるかな。程

六尺
四尺

小早川隆景。
吉川元春。
大塚呼「願、非」
一木所「支也」
(文中子)
尼子勝久。

櫻井白合して一身にあり。六尺の孤公にあらずして誰にか託せむ。公の忠、公の勇、洵に百代に超絶す。殊に公が不屈不撓の精神は鬼神をして感泣せしむるに足れども、如何にせむ。我は敗餘烏合の殘卒、馬疲れ糧乏しきに、敵は幾倍せる精銳新勝の軍、加ふるに小早川の智謀と吉川の武勇とを以てす。戦つて敗れ、敗れて復戦ひ、刀折れ矢盡きぬ。嗚呼、大塚の將に顛れむとする、一木の能く支ふべきにあらず。尼子氏の再舉終に功を奏せざりしは天なり。豈に公が戦の罪ならむや。
由來、成敗を以て英雄を論ずべからず。涙ある者は公の孤忠に泣け。つゆ廉恥の何たるを解せず。武士道の何たるを解せず。一身一家の利害の爲に臣節を左右にし、強者の鼻息を

社一土地神祇
稷一穀物

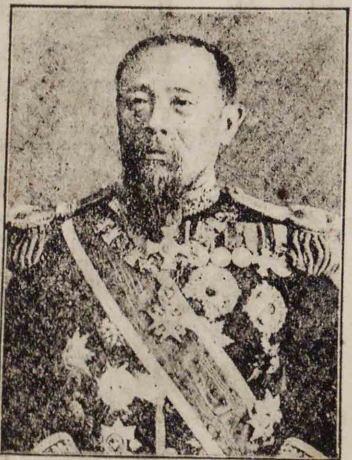
*
聞三伯夷之風
昔、頑夫廉、懦夫
有立レ志。(孟
子萬章下)

伺ひて去就を決し、反覆常なく、骨なく、腸なく、海月も及ばざりし當年の山陰武士の間に、公のごとき熱血硬骨の眞男子ありしは、大冢中の麒麟にも譬ふべし。人生五十年、功名富貴果して何物ぞ。成敗利鈍、天に任せて、鞠躬盡力、斃れて後已むの精神は、これを山中公に見る。公や一身、揮べてこれ、膽、心血を社稷に灑ぎ、俯仰天地に恥ぢず、俠骨稜稜、千載に高し。後世風を聞けば、頑夫も廉に、懦夫も起つ。偉なりと言はざるべけむや。

く滔滔として、千古の恨を語る。嗚呼、公一たび去つて、雲州の地何ぞ寂寞たる。(天町桂月)

八 伊藤公を誄ぶ

明治四十二年十月二十六日、我が友樞密院議長伊藤博文公、韓國兇徒の狙撃する所となり、暴に清國吉林省哈爾賓驛



に薨ず。嗚呼、哀しいかな。予何ぞ多言するに忍びむ。然りと雖も、予君と交はる五十餘年、異體同心、生死苦樂を共にし、國歩艱難の秋に始まり、太平富貴の日に

八 伊藤公を誄ぶ

至り終始渝る事莫し。自ら謂ふ交友の誼今古に愧づるなし。と予遂に復一言せずして止む可からず。予君に長ずる事六年。君子の垂死を哭する事二回。予幸に君の秀護に因つて再生するを得たり。料らざりき。今日反つて君の葬を送らむとは。嗚呼哀しいかな。

回憶すれば四十七年前。文久癸亥の仲夏。君予とともに發憤して海軍の術を學ばむと欲し。禁を犯して。潛に泰西に航し。居ること纔に半年餘。馬關鹿兒島の攘夷を聞き。意を決して急に還り首として開國を唱へ。故國を危難より脱せしむ。内訌尋て起り。予は暗夜要撃に遭うて殆ど死し。君は高杉を助けて兵を擧げ。藩論を回復し。我が一大危機を轉過せり。已

甲子丙子戊巳庚辰壬戌
キムワカ
十干

癸亥
猪
シラトイ

子丑寅卯辰巳
午未申酉戌亥
十三支

午
高杉晋作

本戸幸尤。

大久保利通。

にして王政復古乃ち徵士に擧げられ。版籍奉還の際。君。木戸。大久保二公を佐けて尤も力あり。維新の績これよりして破竹のごとし。進取の宏謀を翼賛し。維新の大業を成就す。敕を奉じて憲法を創定し。長く國家の本を固くし。その他。法律。制度の設。槩ね君に俟たざる莫く。洵に組織の才を推す。四度總理大臣となりて勳業の盛を極め。首に韓國統監となりて保護の範に立つ。

君。學漢洋を該ね。識東西に通ず。尤も東洋の平和を以て念と爲し。常に忠節道義を以て淬礪し。王臣匪躬を以て自ら任ず。故に國民は仰いて文治の宗と爲し。外人は視て平和の表と爲す。留韓四年。歸來未だ會て寧處せず。年七十に垂むとし

八 伊藤公を誄ぶ

て、一歳の行萬哩を期し、朔風を衝いて北滿の野に見學す。盡忠報國の至情に出づるに非ずんば、孰か能くかくの如くならむ。豈に謂はむや、君の忠節にして茲の不測に遭ひ、暴に異邦の地に薨ぜむとは、嗚呼、哀しいかな。

君の訃、電聞す。皇上震悼、敕して國葬を行はしめ、白叟黃童、織婦耕夫も哀悼せざる莫く、乃ち外國帝王、大統領、大臣、紳士に至る迄、親しく弔電を發し、我が不幸を言はざる莫く、内外新聞争うて君の才德勳業を稱贊す。輿望の盛、振古未だ君に比すべきものあらざるなり。抑、予は又これに因りて我が國民に望む事あり。古人云ふ、匪以報公、維以報國。死者復生、信我此言。誠に君の死を哀しまば、則ち宜しく舉國一致、盡忠報國

魏の名將

魏の名將、司馬懿。(一九一一年)
支那甘肅省鞏昌府。
蜀の丞相、諸葛亮。(二一一年)
蜀の顯烈帝、劉禪。(二〇一年)

東洋の平和を維持するに務め、以て君の志を紹ぐべし。庶はくは君をして嘆せしむるを得む。嗚呼、哀しいかな。(井上馨)

九 知己難

朋友にして知己ならざるものあり、知己にして朋友ならざるものあり。否、知己は敵人にもこれあるべきなり。かの仲達が祁山、渭水の空營を按じて、天下の奇才なり。と叫びたるを見れば、かの孔明のためにはよき知己なりしにあらずや。孔明は實に二箇の知己をもてり、敵にては仲達、身方にては玄徳。人は何人とも朋友となるを得べし。情と情と相接する日

知己難 祁山渭水 空營

は即ち朋友の出で来る時なり。觸るれば情を生じ、著すれば情を生じ、久しければ情を生じ、屢すれば情を生ず。竹馬の友、同窓の友、同郷の友、同業の友、同位置の友、同臭味の友、友もまた類多し。然り、天下何人か友ならざるものあらむ。少しく心をとめて談話すれば、東京より横濱に至るまでの汽車中にてすら、幾多の友人は得らるるにあらずや。

知己に至りては然らず。天下千百の朋友を得るは易けれども、一人の知己を得るは難し。知己とは何ぞ。我よりすれば、彼に知らるるなり。彼よりすれば、我知るなり。君ならで、誰にか見せむ梅の花、色をも香をも知る人ぞ知る。これ實に知己に對する情なり。かかる知己を一人にても有すればまだし

古今集、紀友則の歌。

支那戰國時代初期の人。

支那戰國時代初期の人。

中唐の詩人。

楊巨源

楊巨源

も、世には一人の知己をも有せざるもの多し。而して何人も知己を欲せざるは無し。故に一の知己を得れば、殆ど一の生命を得たるよりも嬉しく、一の知己を失へば、一の生命を失ひしよりも悲し。鍾子期死して、伯牙絃を絶ち、荆軻死して、高漸離また筑を撃たず。その心まことに憐むべきものあり。

楊巨源の詩にいはく、詩家清景在、新春柳嫩鶯黃色未勻。若待上林花似錦、出門皆是看花人。と。龍を見て龍となす、難きにあらず。一寸の蛇を見て、はやくもその雲を起し、霧を吐き、茫洋として玄閒を窺め、日月に薄るを知る、これ難きなり。知己の難きは、その未だ發達せざる時において、他日の發達を卜することの難きにあり。その見たる嘻笑怒罵の外に、隠れた

知己難

る冒閑の神祕を會得することの難きにあり。人はその半身以上は祕密なり。知己はよく鍵なくして此の祕密を知る。もとより他の我に向ひて語るを待たざるなり。語るを待ちて之を知るが如き、これ豈に知己ならむや。

知己の感は兄弟の閒にもあり。東坡曾て獄に投ぜられて、重辟に處せられむとするを聞き、その弟、子由に書を贈りていはく、「是處青山可埋骨、他年夜雨獨傷神。與君世世爲兄弟、又結來生未了因。」と。その同胞の情、元より篤し。況やこれに重ぬるに、雙雙知己の恩愛を以てするに於てをや。死後なほ兄弟となり、その未了因を繋ぐむといふ。世の兄弟にして斯くの如き知己の感あるもの、古往今來、それいくばくぞ。

(一) 蘇軾、東坡はその字。(二) 蘇軾、子由はその字。(三) 蘇軾、子由はその字。(四) 蘇軾、子由はその字。

(三) 前漢の賈誼。(四) 戰國時代の楚の人。名は平。文章派。(一) 賈誼。

(五) Cicero. (B.C.106-43)

(六) Scipio. (B.C.185?-129)

ローマの名將。

知己は敵人にあるのみならず、生面の人にもあり。或は古人に對してもあり。知己の交感は時を問はず、處を論ぜず。賈生か屈原を慕ひ、孟軻が孔子を慕ひ、しかして孔子が周公を慕ひて、甚しい哉、吾が衰へや。久しい哉、吾また夢に周公を見ず。といひしが如き、その言の濃到、深切、感ずべきにあらずや。キケロ曰く、「余に對しては、スキピオなほ生けるなり。而して以て常に生くべし。」と。嗚呼、宇宙茫茫、ただ知己ありて以て繋ぐ所あり。知己なくば人生は荒野のみ、荆棘のみ。

人は知己のためにその憂苦患難をともしするを厭はず。甚しきは其の一身を投じて知己のために犠牲となるものあり。かれ等は漫に犠牲となるにあらず、實に知己のために

*唐の人。太宗の朝に侍中たり。
(1180-1190)

犠牲となるなり。苟も一の知己を得る、生命を捨つるも悔い
ず。況や區區たる浮世の名利をや。魏^{*}徴が、「人生感^ス意氣功名誰
復論^ト」といふ句は、實に人の深奥なる思想を吐露したるもの
なり。

人生の最も清福なるは知己を持てるにあり。朋友中、知己
を持てるは最も清福なり。而してその兄弟姉妹・父母の中に
知己を持てるは、最も大いなる清福なり。かの東坡子由の如
く、風雨の夜、兄弟牀を並べて千古の懷を敍するを得ば、天下
又これに優る清福なからむ。(徳富蘇峯)

一〇 山寨

一、

遽 ^ト にもこの日は暮れて、	くらがりの如法夜叉闇、
むら杉の木立とどろと	搔亂し狂ふあらしや。
面うつは雨か霰か、	矢番へて射るにも似たり。
この山に魔障のありて、	義經をためすとならば、
それもよし、雨とあらしと	歇まずあれ、百日、八十宵。

足柄を越えに其の日、
義經に東の國の
荒武者を三千餘騎
卒め立つ大將軍と
ならむこと許しまさずば、
この峯をやはかは西へ
往なむやと誓ひし我ぞ。

商人のおやち吉次は
 我が君をゐて行く程の
 年年に黄金買へばや、
 「蹈迷ひ山路に暮れし
 京なまり、小唄をかしく、
 かかる折、地を裂くばかり
 「あ」と見れば、復も一すぢ、
 幸や、一目見つるは
 さぐりより、叩き給へば、
 鞍馬なる法師たばかり
 末の世の不敵人なり、
 陸奥の旅も幾たび、
 恐しき夜にも慣れぬ」と
 もろ手うつ、大荒れの中、
 一すぢのいなづまの影、
 すさまじき光さしけり。
 おごそかに大きな門、
 内よりは、けはひ優しく

袖おほひ、手燭さしのべ、

うらわかき婦いで來ぬ。

*陸前國宮城郡なる鹽竈神社。

「鹽竈に詣づるものぞ、
 ゆくりなく訪ふも縁や、
 額白き婦すがたの、
 「わが夫こそ、國をゆすりて
 よき敵の今日もありてか、
 宿一夜、貸しまつらむは
 さりとしも夫の知りなば、
 かく應へ、ためらひぬるに、
 行きくれて雨に惱めり。
 宿かせ」とのたまひたれば、
 もの羞ぢて口籠る聲に、
 人の知る心猛なれ。
 朝出でて、いまだ歸らず。
 何ほどの事となけれど、
 客人に悪しき目みせむ。」
 「あさはかのこと宣ふよ、

いささかの情おほさば、 足弱の旅の者、
「しばしだに寄れ」と言はずや。」

ことわりに女は打笑みて、「いさ内へ、さらば客人。
歸り來む主に知らさじと、 灯は消して、衾しきませ。
くだかけの一聲鳴かば、 とく起きて出立ち給へ。
人の世は、とにもかくにも 安からず、障はあるよ。
わび給ふ秋の一夜も 或時はおもひてにこそ。」

二、

義經と商人吉次、

内に入り、あたりを見れば、

さながらに國司が館か、 いかめしく城づくりせり。
なかなか灯明くかかげ、 常のごと高き軒に、
肱枕、吉次とならべ、 おほらかに眠りましけり。

夜も更けて、子も過ぎし程、 門あらく、足ふみならし、
鬼づらの老武者どもは、 右ひだり、四天王のさま、
おのおのがとりし矛には、 なまぐさき生血たれたり、
こは如何に、勝ち誇りたる 十八の面のくれなぬ、
悠悠と笑ひささめき、 山寨の主は歸り來ぬ。

わかき眉、くろく秀でて、 眼ざしのこはき下には、

江戸葛西、西の大名、一目みて百里のがれむ。
 つはものに手斧にぎらせ、まらうどの衾めぐりて、
 手を三たび拍てば、漸う折烏帽子すこしく揺れて、
 欠伸して起き給ふかな。

「あな、ゆゆし、此の年ごろを東國の鄙に育てば、
 われ未だまらうどのごとをかされぬ威形そなはり、
 膽ふとく、天が下呑む將軍の相こそ知らね。
 沈みては龍もしばらくこもり沼に隠れぬる世ぞ。
 雲まちて此處にも一人、名のりせむ、いざとぞいへる。

「似かよへる汝が若さよ。おもしろし、願は容れむ。
 我こそは源氏の嫡流、義朝が末子九郎義經。
 おもひ立つ志あり、奥州の秀衡たより、
 はるばると都を出でて、うき旅に年を重ねつ。
 はからずも今宵の宿に、縁ありて名のりはするぞ。」

「あなや」とて座を滑り伏し、「さればこそ、此の僻目にも、
 人中の眞玉しら玉、氏高き君と見わきしか。
 やつがれが父なるものは、伊勢にして源氏に仕へ、
 左馬頭うたれ給ひし、その後を此處にさすらひ、
 國人の中に生みしが、かく申す伊勢の三郎。」

*源義朝

甲斐もなき僕ながら、
 花さかむ源氏の御世に、
 つはものをみそかに備へ、
 岩が鼻山の名聞くも
 山だちの姿あさまし。
 年頃の願かなひて
 妻を呼べば、青きからぎぬ、
 奉るいはひの酒は。
 百萬の平家ありとも、

年日頃いかで二たび
 天が下なしまつらばと、
 時まちて此處に候へ。
 をさな兒が泣をとどむる、
 かくしてぞ身は糞しける、
 我が君を今宵見まつる。」と
 赤裳ひき、御銚子とりて
 「聞し召せ、おふけなけれど、
 みさぶらひ三郎ここに

一人して楯は足れり。」と

雄雄しくも誓ひ誓ひぬ。

しろがねの轡はませし
 奥州へ御供の門出、
 さばかりの雨雲はれて、
 いはけなき女ごころや、
 將軍とわが夫の上に

君が馬、おのれ口とり、
 さらばとて勇めるうしろ、
 くだかけはほがらに鳴きぬ。
 涙ぐみ見おくる柱。
 下野の夜は明けにけり。

(與謝野鐵幹)

後鳥羽
 崇徳上皇の御所
 時、保元元年二
 年七月、
 藤原頼長

一一 白河殿の夜討

白河殿には斯くともしるしめさざりしかば、左大臣殿、武

一一 白河殿の夜討

五七

院、御所
 平氏所

後白河天皇の御所を指す、高松殿なり。

除目 七臣ヲ除キ、其ノ他ノ役人ヲ任シテ事ヲ行フ。中ニ任シテ事ヲ行フ。中ニ任シテ事ヲ行フ。

(三) 賀茂河原。

者所の親久を召されて内裏の様見て参れ。と仰せければ、親
 久乃ち馳せかへり官軍既に寄せ候。と申しも果てぬに、先陣
 既に馳來る。その時、鎮西八郎申しけるは、爲朝が千度申しつ
 るはここ候。ここ候。と忿りけれども力及ばず爲朝を勇ませ
 む爲にや、俄に除目行はれて藏人たるべき由仰せけり。八郎、
 これは何といふ事ぞ。敵既に寄せ來るに、方方の手分をこそ
 せられむずれ、只今の除目物騒なり。人人は何にもなり給へ。
 爲朝は今日、藏人と呼ばれても何かせむ。只もとの鎮西八郎
 にては候はむ。とぞ申しける。

さる程に、安藝守清盛は三條へうち下り、河原を馳渡し、隄
 を上りに北へ歩ませ、二條河原の東隄にぞ控へける。その

貞炊

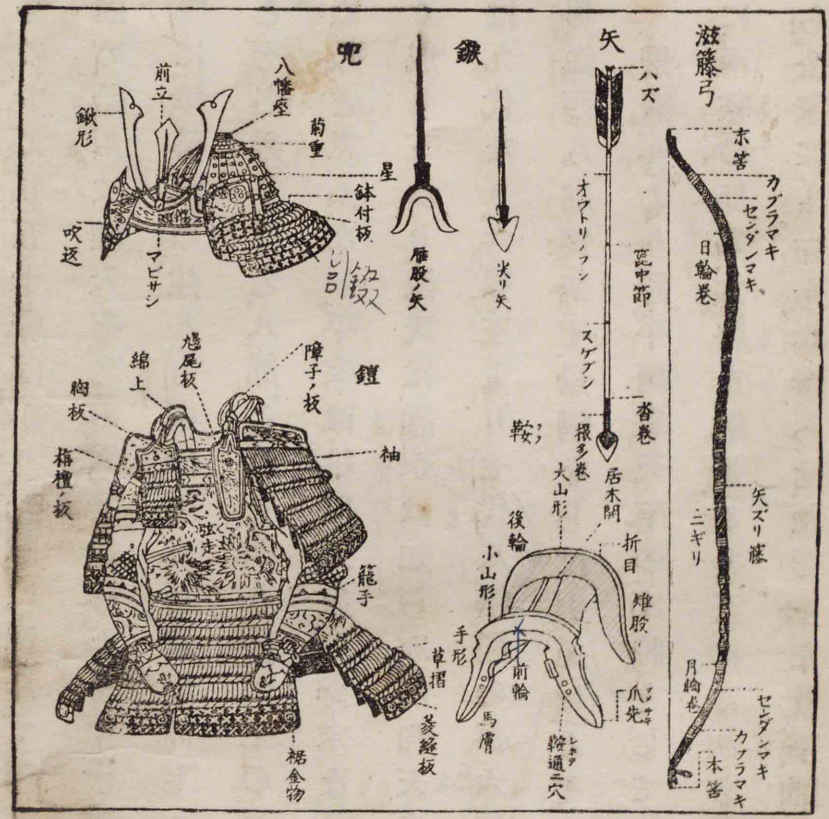
|||||

(三) 桓武天皇を申す。柏原は同天皇の山殿所之地。

(四) 檢非違使尉(判官)に任ぜられ、二條堀川に住む。

勢の中より五十騎ばかり先陣に進んで押寄せたり。ここを
 固め給ふは誰人ぞ、名のらせ給へ。かく申すは安藝守殿の郎
 等に、伊勢國の住人、古市伊藤、武者景綱、同じき伊藤五、伊藤六。
 とぞ名乗りける。八郎これを聞き、汝が主の清盛をだに合は
 ぬ敵と思ふなり。平家は柏原天皇の御末なれども、時代久し
 く成り下れり。源氏は誰かは知らぬ。清和天皇より爲朝まで
 は九代なり。六孫王より七代、八幡殿の孫六條判官爲義が八
 男、鎮西八郎爲朝ぞ。景綱ならば引退け。とぞ宣ひける。

景綱、昔より源平兩家天下の武將として、遠敵の輩を討つ
 に、兩家の郎等、大將を射ること互にこれあり。同じ郎等なが
 ら、公家にも知られ参らせたる身なり。下郎らの射る矢立つ



か立たぬか、御覽せよ」と、能つ引いて射たれども爲朝これをも事ともせず、合はぬ敵と思へども、汝が詞の優しさに、矢一つ賜はらむを受けて見よ。且つは今生の面

伊藤五郎は一丁一丁と
射るにや
伊藤五郎は一丁一丁と
射るにや
伊藤五郎は一丁一丁と
射るにや

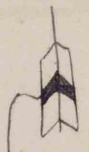
清原武則。

目、又は後生の思ひ出にもせよ。とて、三年竹の節近なるを少し押磨いて、山鳥の尾を以て矧ぎたるに、七寸五分の丸根の筒中過ぎて筒代のあるを打食はせ、暫く保ちてひやうと射る。眞先に進んだる伊藤六が曾板かけず射通し、餘る矢が伊藤五の射向けの袖に裏かいてぞ立つたりける。六郎は矢場に落ちて死にたりけり。

伊藤五この矢を折りかけて大將軍の前に参つて、「八郎御曹司の矢御覽候へ、凡夫の所爲とも覺え候はず。六郎既に死に候ひぬ」と申せば、安藝守を始めてこの矢を見る兵ども、皆舌を振つてぞ恐れける。景綱申しけるは、「かの先祖八幡殿、後三年の合戦の時、出羽國金澤の城にて、武則が申しけるは、君

の御矢に中る者、鎧兜を射通されずといふ事なし。抑、君の御
 弓勢を慥に拜み奉らばや。と望みければ、義家、革よき鎧三領
 重ね、木の枝に懸けて、六重を射通し給ひければ、鬼神の變化
 とぞ恐れける。これより彌、兵ども歸服しけりと申し傳へて
 聞くばかりなり。眼前にかかる弓勢も待るにや、あな怖し。と
 ぞおぢあへる。

かく口口にいはれて、大將宣ひけるは、必ず、清盛がこの門
 を承つて向ひたるにもあらず、何となく押寄せたるにてこ
 そあれ、何方へも寄せよかし。さらば東の門か。とあれば、兵み
 な、それもこの門近く候へば、もし同じ人や固めて候らむ。た
 だ北の門へ向はせ給へ。といへば、さも言はれたり。今は程な



*

く夜も明けなむげ。然れば小勢に大勢驅立てられむ。見苦
 しかりなむ。とて引退く所に、嫡子中務少輔重盛、生年十九歳、
 赤地の錦の直垂に、澤湯威の鎧に、白星の兜を著、二十四差し
 たる中黒の矢負ひ、二所籐の弓持つて、黄河原毛なる馬に乗
 り、進み出でて、救命を蒙りてまかり向ひたる者が、敵陣こは
 しとて引返す様やあるべき。續けや若者。とて驅出でられけ
 るを、清盛これを見て、有るべうもなし。あれ制せよ。者ども、爲
 朝が弓勢は目に見えたる事ぞかし。あやまらずな。と宣ひけ
 れば、兵ども前に馳せふさがりければ、力なく、京極を上りに
 春日表の門へぞ寄せられける。

奚に安藝守の郎等に、伊賀國の住人山田小三郎伊行とい

ふは又なき剛の者、かたかは破りの野猪武者なるが、大將軍の引き給ふを見て、さればとて、矢一筋に恐れ、向ひたる陣を引くことやある。たとひ筑紫八郎殿の矢なりとも、伊行が鎧はよも通らじ。五代傳へて軍に遭ふこと十五箇度、我が手に取つても度度多くの矢どもを受けしかど、未だ裏をばかかぬものを。人人見給へ、八郎殿の矢一つ受けて物語にせむ。とて驅けいづれば、馬鹿をこの功名はせぬに如かず、無益なり。と同僚ども制すれども、元より言ひつる言葉を返さぬ男にて、夜明けて後に、傍輩の「いて、矢目見む」といはむには、何とかその時答ふべき。然れば、日頃の功名も失せなむ事の無念なれば、よしよし、人は續かずとも、おのれ證人に立つべし。とて、下

ヨモ

平正盛

人一人相具して黒革威の鎧に、同じ義の五枚兜を猪頸に著、十八差したる染羽の矢負ひ、塗籠籐の弓持ち、鹿毛なる馬に黒鞍置きて乗つたりけり。門前に馬をかけする物そのものにはあらねども、安藝守の郎等、伊賀國の住人、山田小三郎伊行、生年二十八、堀河院の御宇、嘉承三年正月二十六日、對馬守義親追討の時、故備前守殿の眞先かけて、公家にも知られ奉りし山田庄司行末が孫なり。山賊強盜を搦め捕る事は數を知らず、合戦の場にも度度に及びて高名仕りたる者ぞかし。承り及ぶ八郎御曹司を一目見奉らばや、と申しければ、爲朝「二定きやつは引儲けてぞいふらむ。一の矢をば射させむ。ず二の矢を番はむ所を射おとさむ。ず同じくば、矢のたまらむ」

馬弓手
左手
右手

(一) 近江國滋賀郡にありき。
(二) 近江國愛知郡。

所を、我が弓勢を敵に見せむと宣ひて、白蘆毛なる馬に金覆輪の鞍置きて乗りたりけるが、かけ出でて、鎮西八郎これにありと名乗り給ふ所を、本より引儲けたる箭なれば、弦音高く切つて發つ。御曹司の弓手の草摺を縫ひ様にぞ射切つたる。一の矢を射損じて二の矢を番ふ所を爲朝よつびいてひやうと射る。山田小三郎が鞍の前輪より鎧の草摺を尻輪懸けて、矢先三寸餘りぞ射通したる。暫しは矢にかせがれてたまる様にぞ見えし、即ち弓手の方へ眞逆様に落つれば、矢尻は鞍に留まりて、馬は河原へ馳行けば、下人つと馳寄り、主を肩に引掛けて身方の陣へぞ歸りける。寄手の兵これを見て彌、この門へ向ふ者こそなかりけれ。(保元物語)

今は全く鹽地となれり。

(一) 駿河國駿東郡愛鷹山の嶺なる須戸沼附近の原野。
(二) 駿河國鹿原郡興津町の南方海岸。
(三) 相模國中郡、當今小磯は大磯町に合併せらる。
(四) 陸前國宮城郡にあり。
(五) 羽後國由利郡象潟町附近の海岸なり。昔八十八湯九十九湯ありて奇勝の名ありしが、文化元年鳥海山の噴火にて埋没。
(六) 上野國羣馬郡佐野村鳥川の渡。
(七) 信濃國西筑摩郡木曾川の上流土地幽遠山水の奇勝多し。
(八) 一八二八。

菅原
菅屋
菅原

一一一 白峯の陵

逢阪の關守に許されてより、秋來し山のもみぢ葉見すごし、難く濱千鳥のあと踏みつくる。鳴海灣、富士の高根の煙、浮島が原、清見が關、大磯、小磯の浦、浦むらさき匂ふ武藏野の原、鹽竈の和ぎたる朝げしき、象潟の蟹が苦屋、佐野の舟橋、木曾のかけ橋、心のとどまらぬ方ぞなきに、なほ西の國の歌枕見まほしとて、仁安三年の秋は、霞がちる難波を経て、須磨、明石の浦吹く風を身にしめつつも、行き行きて、讚岐の眞尾、阪の林といふにしばらく節をとどむ草枕、遙けき旅路のいたはりにあらず、觀念修行の便りとせし庵なりけり。

説鼓樹綾歌郡松山村。崇徳天皇。

守口如瓶「みななしの山の口なし染て着む聞かねは何を人に告めや」餘寄

この里近き白峯といふ所にこそ新院の陵はあれと聞き
て、拜み奉らばやと、十月はじめつ方、かの山に登る。松柏は奥
深く茂り合ひて、青雲のたなびく日すら小雨を降るが如
し。兒が嶽といふけはしき嶺うしるに峙ちて、千仞の谷底よ

古口如瓶
みれ難しゆの山に如きは
やういふ人うらまされ

續筆成秋田上

り雲霧おひのほれば、まのあたりもおぼつかなき心ちせら
る。木立わづかにすきたる所に、土高く積みたるが上に、石を
三かさねに疊みなしたるが、うばらかづらに埋れてうら悲
しきを、これなむ陵よと思へば、心もかきくらまされて、更に

貌姑射山有神人
居之

夢現とも分きがたし。

げにまのあたりに見奉りしは、紫宸清涼の御座に大政き
こしめさせ給ふを、百のつかさ人は、かく賢き君ぞとて、御言
かしこみて仕へまつりき。近衛院に譲りましし後も、貌姑射
の山の玉の林をしめさせ給ひしに、思ひきや、麋鹿の通ふ路
のみ見えて、まうづる人もなき深山のおどろの下に、神がく
れ給はむとは、萬乗の君にてわたらせ給ふさへ、宿世の業と
いふもののおそろしくも添ひたてまつりて、罪をのがれさ
せ給はざりしよと、世のはかなきに思ひつづけて、涙わき出
づるがごとし。夜もすがら供養し奉らばやと、陵の前の平な
る石の上に座を占めて、經文靜に誦しつづも、かつ歌詠みて

蒲團

たてまつる。

松山の浪のけしきはかはらじを、

かたなく君はなりましにけり。

尚こころ怠らず供養す。露いかばかり袂に深かりけむ。日

は入りしほどに、山深き夜のさま常ならで、石の牀、木の葉の

衾いとさむく、神清み、骨冷えて、物とはなしにすさまじき心

ちせらる。

月は出てしかど、茂樹がもと影をも漏さねば、あやなき

闇にうらぶれて、眠るともなきに、まさしく「圓位、圓位」と喚ぶ

聲す。眼をひらきて透し見れば、そのさま異なる人の背高く

瘦せ衰へたるが、顔のかたち、著たる衣の色、紋も見えて、こな

たに對ひて立てるを、西行もとより道心の法師なれば、おそ

ろしともなくて、此處に來たるは誰ぞ」といへば、かの人がいふ、

「前によみつる言の葉の返りごと聞えむとて見えつるなり」と

とて

松山の浪に流れて來し船の、

やがてむなしくなりにけるかな。

「嬉しくも詣でつるよ」と聞ゆるに、西行、新院の靈なることを

知りて、地にぬかづき、涙にしぼし咽びぬ。(上田秋成「雨月物語」)

俊寛

一三 俊寛

さる程に、鬼界島の流人共の召還さるべきこと定まりし

九州、先島

*平清盛。

かば、入道相國の赦文書いてぞたうでける。御使既に都をたつ。宰相餘りの嬉しさに、御使に私の使を添へて下されける。夜を書にし急ぎ下れとありしかども、心に任せぬ海路なれば、浪風を凌いでゆく程に、都をば文月下句に出でたれども、長月二十日頃にぞ鬼界島には著きにける。

御使は丹。左衛門尉基康といふ者なり。急ぎ船より上り、これに、都より流され給ひたりし平判官康頼入道丹波少將殿やおはすと聲聲にぞたづねける。二人の人人は、例の熊野詣してなかりけり。俊寛一人ありけるが、これを聞きて、あまりに思へば夢やらむ。又、天魔波旬の我が心を誑さむといふやらむ。現とも更に覺えぬものかな。とて、あわてふためき、走

佛道ヲ修ムルニ
シヤムスルモノ

中宮

建礼内院
徳子
上皇
天皇
皇太子

るともなく、倒るるともなく、急ぎ御使の前に行向つて、これこそ流されたる俊寛よと名告り給へば、雑色が頸に懸けさせたる布袋より、入道相國の赦文を取りいでて奉る。これをあけて見給ふに、重科は遠流に免ず。早く歸洛の思をなすべし。今度、中宮御産の御祈によりて、非常の赦行はる。然る間鬼界島の流人、少將成經、康頼法師、赦免とばかり書かれて、俊寛といふ文字はなし。禮紙にぞあるらむとて、禮紙を見るにも見えず。奥より端へ読み、端より奥へ読みけれども、二人とばかり書かれて、三人とは書かれず。さる程に、少將や康頼法師も出てきたり、少將の取りて見るにも、康頼法師が讀みけるにも、二人とばかり書かれて、三

人とは書かれざりけり。夢にこそかかるとはあれ。夢かと思ひなさむとすれば現なり。現かと思へばまた夢の如し。その上、二人の人人の許へは、都より言傳てたる文ども幾らもありけれども、俊寛僧都の許へは言問ふ文一つもなし。されば我が縁の者どもは、皆都の中に跡を止めずなりにけるよと思ひ遣るにも覺束なし。抑、我等三人は同じ罪、配處も同じ處なり。いかなれば赦免の時二人は召還されて、一人爰に残すべき。平家の思ひ忘れかや、執筆のあやまりか、こはいかにしたる事どもぞや。と、天に仰ぎ地に伏して、泣き悲しめどもかひぞなき。

僧都、少將の袂にすがり、俊寛がかやうになるといふも、御

故大納言
(彦原成親)

邊の父、故大納言殿のよしなき謀叛の故なり。されば外の事と思ひ給ふべからず、赦されなければ、都までこそ協はずとも、せめてはこの船に乗せて、九國の地まで著けて給へ。各これにおはしつる程こそ、春は燕、秋は田の面の雁の音づるるやうに、おのづから故郷の事をも傳へ聞きつれ。今より後は何としてか聞くべき。とて、悶え焦れ給ひけり。少將、誠にそこそは思しめされ候らめ。我等が召還さるる嬉しさも、さることにては候へども、御有様を見奉るに、更に行くべき空も覺え候はず。この船にうち乗せ奉りて上りたくは候へども、都の御使、如何にも協ふまじき由を頻に申す。その上、赦されもなきに、三人ながら島の内を出でたりなど聞え候はば、な

なツか悪クしく候マひなむズず成ニ經マまツづ罷リ上ツつて人人にもよく
 よく申シ合せ入道相國の氣色をも伺ヒ迎ニに人を奉ラむソそ
 の程ハ日頃おハしツるやうに思ヒなシて待チ給ヘ命ハい
 かにも大切のコとなレばたとひこの瀬ニ洩レさせ給ふと
 も終ニには何カ赦免なクて候ベきとさまままに慰メ宣ヘど
 も僧都たへ忍ぶべくも見え給はず。

さるほどに船いださむとしければ僧都船に乗りては下
 りつ下りては乗りつあらまし事をぞし給ひける少將の形
 見ニには夜の衾康頼入道が形見には一部の法華經をぞ止め
 ける既ニに纜解きて船おしいだせば僧都綱に取りつき腰に
 なり脇になり丈の立つまては引かれて出づ丈も及ばずな

* 飲明天皇の朝、
 大伴佐比古の
 新羅に遣はされ
 し時、その妻の
 小夜姫が別を惜
 しみて松浦山に
 登り、衣の領巾
 を握つて船を招
 きしをいふ。

りければ僧都船に取りつき、さて各、俊寛をば終に捨てはて
 給ふか日頃の情も今は何ならず赦されなければ都まてこ
 そ協はずともせめてこの船に乗せて九國の地までと口説
 かれけれども都の御使如何にも協ひ候まじとて取りつき
 給ひつる手を引きのけて船をば終に漕ぎいだす。
 僧都せむ方なさに渚に上り倒れ伏し稗なき者の乳母や
 母などを慕ふやうに足摺をしてこれ乗せて行け具して行
 けと宣ひてをめき叫び給へども漕ぎゆく船の習にて跡は
 白波ばかりなり未だ遠からぬ船なれども涙に暮れて見え
 ざりければ僧都高き處に走り上り沖の方をぞ招きけるか
 の松浦小夜姫が唐船を慕ひつつ領巾振りけむもこれには

＊ 婦人の髪をかきてしりりと
 七七

過ぎじとぞ見えし。

さる程に、船も漕ぎかくれ、日も暮るれども、僧都あやしの
臥處へも歸らず、波に足打洗はせ、露に萎れて、その夜は其處
に明しける。さりとも少將は情深き人なれば、よき様に申す
事もやと頼みを懸けて、その瀬に身をも投げざりし心の申
こそはかなけれ。昔、早利・即利が海巖山へ放たれたりけむ悲
しみも、今こそ思ひ知られけれ。(平家物語)

*早利・即利の兄弟繼母に於かれ
て絶海の孤島に
捨てられしこと
淨土本縁經に見
ゆ。

一四 わが家の富

家は十坪に過ぎず、庭は唯三坪。誰かいふ狭くして且つ陋
なりと。家陋なりと雖も膝を容るべく、庭狭しと雖も仰いて

碧空を望むべく、歩して永遠を思ふに足る。

神の月日は此處にも照れば、四季も來り、風・雨・雪・霰かはる
がはる到りて興淺からず。蝶來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥
來りて遊び、秋蛩また吟ず。靜に觀ずれば、宇宙の富は殆ど三
坪の庭に溢るるを覺ゆるなり。

庭に一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白き花開
いて樹に滿つ。風ある日には、青青と霞める空より白き花ち
らちらと舞ひて、一庭須臾に雪を散す。鄰家に花樹おほし、風
に隨ひて、飛花わが庭に落つ。紅雨霏霏、白雪紛紛、見るがうち
に、滿庭、花の衣を著く。仔細に見れば、桃の花あり、櫻の花あり、
椿の花あり、山吹の花あり、李の花あり。

〔一〕 蛻巖、明石
〔二〕 藤の儒者。〔三〕
〔四〕

庭隅に一株の山榭あり。五月闇鬱陶しき頃、香しき花開く。
主も妻も無口なれば、この花のわが家に開くは宜なりけり。
老李の背後に一株の碧梧あり。その幹亭亭として些の邪
なく、わが如く直かれと教ふるに似たり。これと手水鉢の側
なる八角金盤とは、葉廣うしてわが家の雨聲を多からしむ。
李熟して白粉ふきたる琥珀玉の滾滾と地に落つる頃は、與
へて喜ばせむ男の子一人欲しと思ふ心も起りぬ。

つくつくほふしの聲に、世はいつしか秋に入りて、山茶花
咲き、三尺ばかりの楓も紅に燃えて、ただ一株前の家主の
植残したる黄菊も咲きいづ。名苑の花美しと云ふとも秋の
あはれ、閑寂の趣は却てわが庭の一枝にあるべし。蛻巖の翁

〔一〕 珠樹連、雲秋色
飛、獨憐細菊近
荆扉、登高能賦
今誰是、海内文
章落、布衣。〔二〕 蛻
巖の時

ならば、獨憐細菊近荆扉とや吟せむ。恥づらくは海内文章落
布衣と唱すべき身にあらざること。

屋後に一株の銀杏あり。秋深くしては滿樹黄金よりも黄
なり。木枯の風起れば、その葉翻翻として翻り落つ。半夜夢さ
めて雨かと思ひ、曉に起きて戸を開けば、庭は一夜に金色と
なりぬ。屋根も庇も手水鉢も、處として落葉ならざるはなく、
紅葉さへ落添ひて、寸金と人は云ふなる錦を、我は庭に敷き
つめぬ。

木の葉おちつぐしては流石に淋しげなるも、日影月影い
よいよ多くなりて、空を見、星を見るに障なきは嬉し。

〔德富蘆花〕自然と人生

* Epigram.

警句。

一五 俚諺論

羅馬の一詩人がエピグラムを蜜蜂に譬へて、螫あり、蜜あり、軀は小さし。と言へるは、すべての俚諺にとは言ひ難きも、その最も巧妙なるものには恰當の語なるべし。俚諺の上乗なるものは、多くはこの三者を具ふ。言短くして意義味ふべく、寸鐵人を刺すの妙あり。

人口に膾炙し易からむことを求むる故に、俚諺はおのづから律語を爲す傾あり。我が國語にては、五又は七が自らなる律呂なれば、我が國の俚諺にはこの律に従へるもの甚だ多し。雉子も鳴かざば撃たれまい。心の鬼が身を責める。とい

ふ如く最もよく人口に膾炙せるものにして、七五の調子をなせるはいと多し。人と屏風はすぐには立たぬ。思ふ念力、岩でもとほす。身を捨ててこそ浮む瀬もあれ。などは七七の調子をなして語呂頗るよし。十で神童、十五で才子、二十過ぎてはただの人。といふも、その語に律あり。右と同じ理由により、同語または同音を重ねたる類のものも多し。例へば、多勢に無勢、短氣は損氣、弱り目に祟り目、處かはれば品かはる。藥九層倍、勝つて兜の緒をしめよ。といふが如し。

かく律を成し、尾韻又は頭音を合すこと、詩の句法に似たる所あるのみならず、俚諺に抽象の語少なく、おほくは具體的に言ひなして感動の強からむことを求め、又これが爲に

屢、誇張の言を喜ぶなども、それが詩歌に似たる點なり。この故に、諺にて物の度量をいふにはその數又は量を定めていふを好む。七たびさがして人を疑へ。人の噂も七十五日。預り物は半分の主。などの類は數ふるに違あらず。數の中にも最も好んで用ふるは三の數なるべし。三度目が定の目。三年たてば三つになる。懺悔話をすれば三年の罪が滅びる。三人よれば文殊の智慧。朝起きは三文の徳。その他なほ多かるべし。又、用心は臆病にせよ。黒犬にくはれて、灰の和滓わじにおそれる。などは誇張して言ふによりてその意味を成せるもの例なるべし。

誇張を喜ぶと同じ理由を以て、俚諺は一見實まことしやかなら

Paradox
逆説

ぬ語句、即ちパラドックスを用ふるを喜ぶ。この種の諺に深く味ふべきもの少なからず。急がばまはれ。言はぬは言ふに勝る。逢ふは別のはじめ。兄弟は他人の始まり。論語讀の論語知らず。人を使ふは使はれる。など、その例なるべし。かく相反するが如き事柄の中に、却て相通ずる所あるを發見するは、深邃なる智慧の一特徴なり。

パラドックスといふにはあらずとも、總じて反對のものを相竝ぶるは、吾人の注意を捕ふる一方便なり。俚諺は總じて對照を喜ぶ。骨折損の草臥儲。聞いて極樂、見て地獄。問ふは一旦の恥、問はぬは一生の恥。長者の萬燈より貧者の一燈。などその例なり。

俚諺論

反對を並ぶるのみならず、總じて二種の事柄を相並べて、それを比照するは俚諺の一大特色なり。これ俚諺の比喩に富める所以にして、その比喩の極めて巧妙なる、詩人の作としても恥しからぬものあり。俚諺の最も巧妙なるものは、多くこの類にあり。今、思ひ出づるに従うて、その三四の例を掲げむか。馬には乗りて見よ、人には添うて見よ。旅は道づれ、世はなさけ。といふ如きは、幾たび唱するもその趣味の津津たるを覺ゆ。花は櫻木、人は武士。これ我が國民の、以てそが理想を誇るに足るものの一なるべし。佛法と藁屋の雨は出て聞け。風流の心に富める國民ならで、誰かこれをえ言ひいてむ。これを口ずさみ見よ、如何に詩心、道心、宗教心の相結びてな

せる、高雅幽玄なる妙趣の浮び來るぞ。

かく二つの事を並べ出して相比照することなく、ただ普通の暗喩を用ひたるものも頗る多し。例へば、商賣は牛の涎。祕事は睫。といふが如し。而して更にその喩のみを掲げて他の意味を匂はせたるものも、その數多かるべし。蟹は甲に似せて穴を掘る。目糞、鼻糞を嗤ふ。といふ如きはこの例なり。

かく比喩の用ひやうは種種あれど、そのこれを用ふるは寓言に於ける用ひ方とは同じからず。目糞、鼻糞を嗤ふ。といふ如きは、多少、寓言に近寄れる所あるが如く思はるれど、俚諺と寓言とは、後者は敘事(物語)の體裁を具へ、前者は然らざる點に於て全く相異なり。同じく意を寓して比喩を用ふる

も、寓言はこれを出來事又は動作として語り、俚諺は時間
結ばずして、唯、常恆の事實として語るなり。(大西祝)

一六 修辭上の轉義

修辭上で轉義と稱するものは、或語の意義を轉じて、普通
ならぬ意味で用ひた語をいふのである。例へば、「白きこと雪
の如し」といふと、その「雪」は轉義である。蓋し普通語の「雪」には
白いといふことの外に、空から降るものであること、冷かな
こと、消え易いことなどの、様様の意味を含んでゐるのであ
るが、この場合には、唯「白いもの」といふ外に何の意味をも伴
はない。これが轉義の轉義たる所以である。更に他の例をと

(二) High collar.

ると、「花笑ふ」とは言つても、花は齒も出さず、笑聲も漏さぬ。怒
濤と言つても、濤には怒るといふ意志は無い。ハイカラとチ
ヨン鬻とが議論をしてゐる。といふ文中のハイカラは、唯高
い襟といふことでなくて、高い襟を著けた男、或は首の回ら
ない程なカラを好む當世風の男といふ意味である。チヨン
鬻も勿論鬻を指すのではなくて、チヨン鬻を結つてゐるや
うな古風な男といふことである。かかる種類の語を悉く轉
義といふのである。

轉義は、西洋の修辭學者の間に一時盛に研究せられたも
ので、頗る綿密な分類も出來てゐるが、その主要なものは、明
喻・暗喻・換喻・活喻の四つである。

(一) Metaphor.
(二) Simile.

明[○]喩[○]暗[○]喩[○]はともに比喩であつて、種類の違つたものを捉へて來て、當面の事物を形容するものである。雪のやうな紙。人情紙の如し。は明喩。君子の徳は風にして、小人の徳は草なり。草に風を加ふれば必ず伏す。といふのは暗喩である。前者は「やうな」如し「似たり」などの語を以て、その比喩なることを明に示してゐるが、後者はこれ等の語を全く省いたものである。この兩者を比較すると、暗喩は明喩よりも遙に有力である。併し暗喩では意味の明瞭を缺く虞のある場合には、明喩を用ひねばならぬ。いづれにしても、比喩として用ひるものは、讀者の熟知してゐる、なるべく具體的なものでなくては有效でない。

(五) Metonymy.
(六) Symneodoche.

古今集の歌。
龍田川、紅葉亂れて流るめり、

渡らば錦なかや絶えなむ。

梓弓春立ちしより、年月の

射るが如くに思ほゆるかな。

換喩[○]は、或は細別して換喩[○]提喩[○]に分つ。狹義の換喩とは或事物の名を以て、實際上それと關係ある事物の名に代用するもので、原因と結果と、器械と使用者と、記號と實物などを相代へて用ひたもの、例へば近松の著書を讀むことを「近松を讀む」といひ、武家を「甲冑の家」といひ、大學生を「角帽」といふ類は、皆換喩である。提喩は事物の一部分の名を擧げて全體に代へ、或は全體の名を以て一部分を表すもので、「白帆歸る」。

といつて、白帆をかけた船の歸ることをいひ、「花咲く」と言つて、櫻の咲くことを指す類である。しかし換喩と提喩との區別は往往明瞭ならぬことがあつて、學者の閒にも異説がある程である。且つ二者ともに、その物の特質又はそれと關係の深い周圍の事情中で、最も主要な點を摘出してここに注意を集中せしめようとするもので、實用上からいふと、その閒に區別を立てる必要はない。だから二者を一括して換喩と稱へてゐる學者も尠くない。

井原西鶴の句。

鯛は花は見ぬ里もあり、今日の月。

鯛とは美味、花とは美觀の義である。美味にも美觀にも全く接し得ざる僻遠の地に住む者も、今日の明月のみは都會の

與謝蕪村の句。

人にも劣らず樂しむてあらうと云つたので、この句の力は實に「鯛は花は」といふ換喩にある。

五月雨や、物語り行く蓑と傘。

「蓑と傘」とは、勿論、蓑著た百姓と、傘をさした庄屋か地主などの如き男とを云ふのである。若しこれを「物語り行く人二人」などとすれば、極めて平凡であらう。「蓑と傘」といふ轉義の爲に、語りあふ者の姿が畫に見る様に想像せられる。

活喩は、又、擬人法とも稱する。無生物を生物の如く敘したり、或は下等動物を人類の如くに敘したりするもので、巧に用ひたものは、よく想像力を刺戟する。

源俊賴の歌。

暮れはてぬ、歸さは送れ山櫻。

(二) 山崎宗鏡の句。

手を ついて歌申し上ぐる蛙かな。

たがために来てまどふとか知る。

如何なる轉義も、濫用すれば却て文章の力を殺ぐものであるが、ことに活喩は注意して用ひないと、滑稽に終ることが多い。この蛙の活喩のごときも、滑稽に用ひたからこそ面白いのであるが、眞面目な文章には避けねばならぬ。就中、抽象的の事物に活喩を用ひることは、日本語の習慣上極めて稀である。西洋ですら、コレリッヂのごときはこれが濫用を戒めて、抽象せる事物に活喩を用ひることを好み、『宗教は人世を右にし、他界を左にして、かの蒼穹より降り降り』といふが如き言語文章を壮大なりとするものは、純正なる感情の無

(一) Coleridge.
(1772-1834)
英國の文學者。

い者である。』と言つてゐる。

畢竟、轉義は舊套なものを斬新にし、高尚なものを卑近にし、隱微なものを著明にし、理解力に訴ふるものを想像力に訴へて、文章を明晰にし、適勁にするものであるが、若し虚飾に陥ると、天真の活氣を失ひ、普通語よりも文章を曖昧・纖弱ならしむるに至るであらう。エマーソン曰く、『轉義は人間の言語の一大部分を作るものであつて、これなくして不愉快ならぬ會話をなし得るものは極めて稀である。轉義は會話をして光彩あらしめる。巧妙なる比喩の類を耳にすれば、何人も終生忘れることが出来ぬ。』と。又曰く、『その内容に極めて重大なるものあるにあらでは、全く轉義のない文章は成立

(三) Emerson.
(1803-1882)
米國の哲學者にして詩人。

ち得ないものである」と。

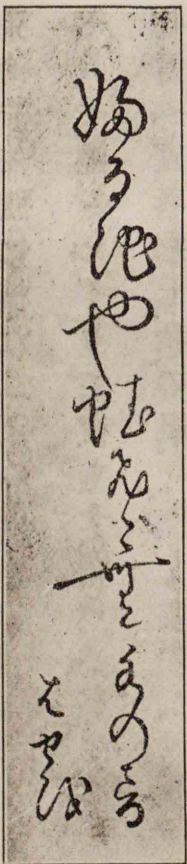
エマーソンの説は疑を容れない。しかし若し轉義の必要のない程な重大なる内容を有する文章が出来たならば、これ實に人間の最も力ある文章であらう。「天にまします我等の父よ、願はくはこの憐むべき羊の羣を救ひ給へ」といふ類の修辭は、充實した内容のない祈禱によく反覆される。若しかの牧師を捉へて濁流に投げこんで見たなら、その美しい轉義が消滅して、「助けてくれい」といふ天真爛漫な叫喚に變ずるであらう。この聲には、大慈大悲の佛神のみならず、凡夫衆生も皆惻隱の心を起して驅附けようとする。重大なる内容には轉義の用がないとは、これを言ふのである。

文章の最も人を動かすものは、内容の力である。ただ、さまでに重大ならぬ内容にもよく傾聽せしむるものは、轉義の力によることが多いのである。

一七 芭蕉と蕪村との句 ○

芭蕉

古池や、蛙飛びこむ水の音。



芭蕉蕪村

雲雀より上にやすらふ峠かな。

ふる池や蛙飛
こむ水の音
はせを

五月雨をあつめて早し、最上川。

荒海や、佐渡に横たふ天の川。

明月や、池をめぐりて夜もすがら。

物言へば唇寒し、秋の風。

金屏の松のふるびや、冬ごもり。

燕村

春の海、終日のたりのたりかな。

いかたしの装
やあらしの花
ころも 燕村

いかにあらしのころも

燕村筆談

さしぬきを足で脱ぐ夜や、曬月

時鳥、平安城をすぢかひに。

明月や、夜は人住まぬ峯の茶屋。

三徑の十歩に盡きて、蓼の花。

化けさうな傘かす寺の時雨かな。

一八 風雅論

東海道の汽車の窗より富士山を眺めても、風雅の嗜ある人となき人とは、その興味を感じずる度に於て大いなる相違あるべし。風雅の嗜は何人にもあり得べく、又、何人にもありたきものなり。

世には風雅人なる者あり。兔角、風雅をば我が物とのみ心

得居るの癖を有す。我が物となすは可なり、ただ我が專有にして人間の共有物たらずと爲すは不可なり。世を避け、俗を脱し、山林に幽棲し、花鳥風月の外、相手となすべきものなき隱居、もしくは詩歌、俳諧、書畫、骨董、茶湯、插花、音樂などの技藝及び鑑識に長じたる専門の知識ある者、もしくはこれ等を致すの資力ある者の如きは、世の所謂風雅の仲間たる特權を有する輩なり。これ或は然るべし。されど風雅の嗜は何人にもあり得べし。その共通的なるは、その根源を人の心に置けばなり。

風雅とは人の境遇に限らず、その教養の有無に限らず、その資力の多寡に限らず、何人にも、優美なる心を以て自然

*百敷の大宮人は
暇あれや、櫻か
ざして今日もく
らしつ。(新古今
集、山部赤人)

と人事とに接して感得するもの、即ちこれのみ、風雅の嗜とは、恆にこの心を失ふなきを謂ふのみ。風雅は必ずしも萬卷の書を読み、天地神人の奥理を究めたる學者にのみ存せず。一字をも解せざる田夫も、犁を手にして、春霞の棚引く裏より、芙蓉峯の白雪の冠を露したるを見て、美なるかなといふ快感を生じ來りたる刹那は、即ち風雅の人たるなり。風雅は必ずしも櫻かざして遊ぶ大宮人のみに限らず、頭上に戴く薪の束に一朶の山櫻を挿み、その心悠悠として、勞を忘るる大原女、亦これ風雅の人たるなり。ただ、肝要なるは、この心を恆に存して失ふことなきと、この心を練磨、教養して愈、その眞醇に近からしむると、これのみ。

風雅は必ずしも外物に存せず。一生、珍畫・名器の裏にありても、遂に風雅の何物たるを解せざるものあり。風雅は必ずしも技藝に存せず。世には詩人にして、畫師にして、音樂者にして、俳諧師にして、俗物あり。又その職業上より見れば、如何にも、俗物たるべき者にして、然らざるものあり。人若し風雅の嗜あるに於ては、その技藝・資力はそれを助成するに力あるべきを疑はずと雖も、これあるが爲に、風雅はここにありと斷言する能はず。否、寧ろこれなきも、苟もその心にして存するあらば、何人も風雅にてあり得べし。生田の森の戦に梅花を簞に插みたる梶原景季を見よ。風雅の風雅たる、それここにあらむ。

風雅の嗜は、人の一生をして興味多からしむ。仰いで浮雲の白きを視、俯して百花の紅なるを觀れば、吾人は、頓に自己を天地の懷に投ずるの感あり。電氣燈を點ずるは何處にても自在に爲し得ることにあらず、而も一片の明月、何人かこれを眺むるを禁じ得るものぞ。風雅は貴族的にもあり、しかも最も多くは平民的に存す。吾人は風雅の嗜を世に普及せしむる事、最も世道人心の改善に於ける要件たるを見る。風雅の嗜ある者は自ら氣品あり。何となれば、利害得失の外に心目を遊ばしむる天地を有すればなり。又、自ら餘裕あり、何となれば、社會の暗黒なる一面を見ると同時に、必ず他の光明なる一面を見ればなり。又、如何なる場合にもその樂

しみを失はず、何となれば、現在の齷齪たる世にありて、却て自然と人事との美を我が心に吸収するを得ればなり。風雅の嗜なき者は、雪降れば寒を厭ひ、歩行の難澀を厭ひ、雪除け代の支出を厭ひて、雪を呪ふの外に心なし。されど少しく風雅の嗜ある者は、嚴冬の枯木、時ならぬ花をつくる奇觀を愛せずんば、あらず。風雅の嗜ある者は、人を怨みず、從容としてその境遇を楽しむ。蓮月尼の歌に曰く、

宿かさぬ人のつらさをなさけにて、

おぼろ月夜の花の下ぶし。

と。若しかくの如く觀じ來らば、人生何くに處して洒然たらざらむや。人或は千金にて茶碗を購ひ、萬金にて畫を求め、風

太田垣氏。(三四五五)
一(三四五五)

雅ここにありと爲す。若しその人にして眞に風雅を解し、且つその力能くこれを致すに餘りあらば、吾人は敢てこれを拒まじ。只徒に器物の末に營營として、漫に多きを貪り、奇に誇らば、これ玩物喪志の類のみ、豈に風雅と謂はむや。新聞の插畫を壁に張りつけ、今戸燒の茶碗にて番茶を喫しても、その心ここに存せば、なほ風雅たるを失はざるなり。

(徳富蘇峯一日曜講壇)

一九 「ヴェニス」の商人「法廷」の場 上

ヴェニス公爵、いかにアントニオはあるか、さてさてその方は氣の毒な者

伊太利ヴェニスの國主。
休氣ある大商人にして、友人パサニオの火急なる必要に應ぜむる爲に、かねて憎める猶太人シヤイロツクより、己が肉一斤を抵當として三千兩を借る。然るに放棄せる貿易船難破して、期を過ぎて返金する能はず。

本課の如く文學史に關する講説に資すべき材料にして文章や平易なるものは、學生の自修に任ずるも可なるべければ、特に小活字を用ひて紙數の節約を圖りたり。以下各卷之に準ず。

* 其利を獲とす
る。唯恐る猫太
人。鷹アントニ
オに公衆の間に
て面罵せられ、
復讐の期を待ち
居たるなり。

ぢや、相手方のシャイロックは頑石同然の人でなし、慈悲憐愍の心として
は微塵ほども無い奴なれば、さぞ心を苦しむることであらう。アントニ
オ「承りますれば、上には御心に掛けさせられ、段段相手方をお諭し下
されましたげに御座りますれど、あくまで執念深く申し張りまする
上からは、所詮免れ難き國法の表、この上は観念仕りまして、心靜に彼
が邪慳の犠牲と相成りまする覺悟に御座りまする。」

公「誰をある、シャイロックを呼入れい。」(シャイロック登場)

公「シャイロック、世上の者も思ひ、予も亦左様存じ居る事ぢやが、何と其
方がこの度の訴訟は、よも本心ではあるまい。事落著の間際と相成り、
俄に打つて變り、慈悲を施し、今責めるこの商人の肉一斤は申すもさ
らなり。元金の大半をも免除なし、重ね重ねの案外に世人を驚かさむ
所存であらうな。近頃引續いて彼が身に降りかかりし不慮の損亡、流
石の大商人なれども、進退谷まる體たらく、よしや心鐵石の如き殘忍
無慈悲を習慣の土耳其鞴の夷たりとも、何條憐憫を抱かざらむ。こ

れやシャイロック、情ある返答を聞きたいものぢやの。」シャイロック「手前の
存じ寄り先達申し上げて置きました。天帝に誓うた上は、證文通り
に是非受取らねばなりません。それをならぬと仰有りますれば、御政
道は暗闇、ヴェニスの國法は無いも同然で御座ります。斯様申したな
ら、なぜ三千兩といふ金は取らないで、役にも立たぬ人肉をたつた一
斤やそこら取るのかと、御不審も御座りませう。その御返事は致しま
せぬが、言はば手前の好き勝手と申したら如何で御座ります。譬へば、
鼠めがあばれて困る、それが憎さに、若し鼠を殺してくれたら、報に一
萬兩やらうと云ふも好き勝手、何とそんなものでは御座りませぬか。
世間には、豕を見れば胷がむかつき、猫を見れば氣が狂ふといふ人も
ある。それもこれも銘銘の持前、とかく好、不好は人の心の操り、絲、百八
煩惱の元締、何で豕が氣にくはぬ、何で猫が嫌だと問はれても、理は言
はれぬ。蟲の好かねえアントニオ、三千兩の抵當に肉一斤でんで桁に
合はぬ取引も、深い怨があるによつて意趣返しがしたいばつかり、外

アトニオの友人にしてアトニオの災厄を聞き、金を懐にしてウエニスに急行すれば、恩人は既にシヤイロツクに歸へられて囹圄の裏にありしなり。

(二) Jew 猶太人。



シヤイロツク

に仔細は御座りませぬ。何とお聞分け下されましたか。バツサニオ、餘りといへば人情知らず。その様な事が、残忍非道な一の御訴訟の申し開きになると思ふか。シヤ、お前さんの氣に入る様

な返事をする義務はない。好かぬからとて殺すといふは人情では無いわい。憎むほどなら殺したいと思ふのが人情の當り前だ。氣にくはぬと憎むとは同じでは無いぞよ。何だと。お前さんは虻に二度咬ませる氣か。あ、これこれ、相手にこそよれ、問答無益。ウに道理を言聞かするは、親羊を鳴かす狼に、なぜ子羊を取つたと詰り、峯の松風、磯打つ浪に音を立てるなと諭すも同然。およそ世の中に頑固なるものヂウウの心に越ゆるはなし。もうもう何も言うて下され

ますな。この上は片時もはやうお裁き受け、彼がなすままになりませう。

「これやシヤイロツク、三千兩をこれこの通り、六千兩にもして返すのぢやわい。」シヤ、六千兩が六萬兩でも、いやさ、六千萬兩でも、取る氣は無い。證文通りが望だ。さばかり他に辛うして、その身に咎の下らむ時如何にして慈悲を求めむとするぞ。曲つた事をせぬ者が、どんな咎を憚りませうぞい。近い例が、お前様方のお邸で飼うて御座る大勢の奴隸衆、金の威光と、お主の威光で、牛馬同様にこき使うて御座らつしやるを、何と引上げてお増様になされませ。なぜあの様な痛はしい酷い仕事をおさせなされます。御前様と同じ様に、柔かい寢臺に寝せて、なぜ旨い物を喰べさせはなさらぬのだ。と申したなら、あれは奴隸だ、買取つたものゆゑ俺のままだ。とさ、仰有るで御座りませう。まつその通り、あの男の肉一斤は大金出して買つた代物、わしの物だからわしが取るのだ。それをならぬと仰有れば、ウエニスの國法は反古同然。御政

* 法學博士にして
ベッサニオの妻
ボオシアの従弟
なり。

道が立ちますまいぞよ。御裁判下されませうや。如何に御座りまする。
公「予が國主たるの威權を以て、法廷を閉ぢむも心任せぢやなれども
豫てこの訴訟は、世に聞えたるベラリオ博士を相招き、取裁かすべき
手筈なれば、程なくこれへ出頭なさむ。」(この時博士の書状を携へたる者來れりと報ず)

110 「ヴェニス」の商人「法廷」の場 中

(ベッサニオの妻ボオシア、ベラリオ博士の代理者バルサザアと稱し、法學博士の服裝にて登場)

公「老博士のもとより参られたるか。」ボオシア「左様に御座りまする。」公「よくこそ参られたれ。先づ席に著かせられよ。儲その許には、只今これにて取調中の訴訟の始終を御存じなりや。」公「委細承知致し居りまする。この中いづれが當の商人にて、いづれがヂェウで御座りますな。」
公「アントニオ、シャイロック。兩人共に前へ出い。」

「シャイロックと申すはその方か。」シヤ「シャイロックは手前で御座りまする。」公「さてさて、その方が今度の訴訟は奇怪至極の訴ぢやの」とはいへ、手續に邪なければヴェニスの國法の表として、これを斥くべき道理は無い。これやアントニオ、そちが一命は訴訟人シャイロックが心のままとな。」ア「左様に申し居りまする。」公「證文の面は毛頭も相違ないか。」ア「相違御座りませぬ。」公「然らむには、シャイロックに於て情をかけねばなるまいぞよ。」シヤ「とは又どういふ據ない仔細が御座りまして、理をお聞かせ下さりませ。」公「ああいや、情は強ふべきものでは無い。春の小雨の音なきごとく、自然に降つて人を潤す。その德澤は二重にして、受くるものにも幸あれば、授くるものはた幸なり。畢竟人君の偉德にして、衆德の集まるところぢや。この德、王者の胷に宿れば、光寶冠に百倍す。笏は人の世の威力を示して、目に見ゆる尊嚴の節となれども、慈悲の德はこれに彌増し、天つ御神のおほん德、慈悲を以て義理をやはらげ、情を以て法度のそなはらぬを補うてこそ、王道初めて天道に合ふの道理ぢや。ぢやによつてシャイロック、その方の申條は義理には恃らず、掟には適うたれども、この道理をよう思へ。若しただ一途に義理を

責め、政道の表のみを強ひて立抜かむとする時は、罪業深き人の身の誰かはこの世に救を得む。明け暮れ神に慈悲を祈るは、取りも直さず餘の人に慈悲を懸けよの誨ならずや。かくまで言葉を費すも、義理一片の訴をなだめむと思へばこそ、承引せずば是非に及ばずのつびきならぬ掟の表、それなる商人をば重き罪科に處せねばならぬ。シヤ、手前の所爲が曲事なら、どんな御罰でも受けませう。御法通り、證文通り、償をお渡し下さりませ。

*「アントニオは金子を拂ふこと相協はぬか。」
「ああいや、その金子はまつこの通り、彼に代り、手前より支拂ひまするで御座りまする。はい、元金の倍額に御座りまする。若しこれにても不足と申さば、手前の手なり、首なり、心臓なり、抵當に致しまして、十倍にして支拂ひまする。なほこれにても承引せずば、訴訟沙汰は表向にて、實は人を陥れて殺さむ底意と存じますれば、何卒お上の御威光にて、大義公道の爲、聊か法を曲げさせられ、この人鬼めを御取押へ下されませう。御願ひ申し

*Daniel.
ヘブリューの
裁判の神。

上げまする。」
「ああいや、その儀は相成らぬ。ヴェニス國廣しと雖も、いかなる權威を以てするも、掟を枉ぐる力は無いぞ。一たび備を作る時は、百の過これに倣ひ、長く國家の禍根とならむ。その儀は固く相成らぬぞ。シヤ、ダニエル様の再來、取りも直さずダニエル様、お若いに似ぬ明判官様、恐れ入つたる御發明。」

*「どうかその證文を見せてくれい。」
「シヤ、これに御座りまする。憚りながら、これに御座りまする。」
「シヤ、ロック、何と、この金額を二倍にして返濟せむと申し居るではないか。」
「シヤ、誓うた上は、誓うた上は、天帝に誓うた上は、おのが魂に背かれませうかい。ヴェニス一國と取換つことにしても、否で御座る。」
「はて、この證文は期限已に切れたれば、國法の表によれば、それなる商人の心元より肉一斤を切取ること、それなる。ヂェウが心の儘……これやシヤ、ロック、情をかけよ。三倍の金子を受取り、身共にこの證文を裂かしてくれい。」
「シヤ、證文通りの支拂が濟んだ後なら、お心任せになさりませ。……お見受け申した處、お立派な判官様、



法の廷の場

法や掟もよう御存じ、御理會も道理千萬、御國法の大家柱とも存じますから、その御國法を楯に御願を申しまするは、やう裁判して下さりませ。心にかうと誓うた上は、人間の舌の力ぢやあ、この心は動かされぬ。證文通りのお裁きをお願

ひ申し上げます。『私よりも申し上げます。何卒お取裁き下されますやう、お願い申し上げます。』

『この上は是非もなし。襟を開き刃を受くる用意いたせ。』

『さしてさて天晴な判官様年に似合はぬ偉いお方ぢや。』

『この證文に見えたる償は正しく國法の旨意に協ひて異議を挿む

べきものにあらず。』『御意の通り、御意の通り、儲儲發明な、依怙最厚のない判官様、見かけは若うても、分別は老人も及ばぬ、さて偉いお方様ぢや。』

『この上は胷を露す仕度いたせ。』

『はいはい。胷で御座る。證文に左様認めて御座ります。……すぐ胷元より』と御座りませうがな。『いかにも……肉を量る秤は有るか。』

『はいはい。』

『シャイロック、その方自辨にて、外科醫者を呼寄せおけ、傷口を止めぬ時は、命を失ふも圖られねば。』『左様な事が證文に認めて御座りまするか。』『いや、認めては無けれども、さばかりの情を掛くるは當然ぢやわい。』『手前は會得致しませぬ。證文に書いて御座りませぬ。』

『商人、何も申す事はないか。』『とくより覺悟致し居りますれば、改めて申すほどの事も御座りませぬ。』

『何のかのと時がたつ。御宣告を願ひまする。』

「これなる商人アントニオの肉一斤はその方の物ぢや。法廷これを許し、國法これを與ふるぞ。」

「さつても公平な明判官様。」

「この上はその方是非自ら手を下して、彼が胷元より肉一斤を切取るべし、國法これを認め、法廷これを許すぞ。」

「さつても博學な判官様だ。御宣告だ、覺悟しろ。」

一一一 「ヴェニス」の商人「法廷」の場下

「待て、暫く、今一言申す事あり、これこの證文には、血汐は只の一滴たりとも、その方に遺すと書いてはないぞ、肉一斤と明白に書いたる上は、證文通り、肉一斤を取らむは儘……なれども切取るそのはづみに、基督信者が鮮血の只一滴だに灑ぐに於ては、地所も家財も悉く、ヴェニスの國法に依つて、ヴェニスの國庫に沒收致すぞ。」

「フランシヤノ」依怙鼻頂の無い判官様、どうだ、ヂェウ、さて博學な判官様だ。」

「それがお掟で御座りますか。」疑はば自ら調べ見よ、強ひて條文を楯となし、偏に嚴罰を課せむとする故、己に出づるもの己に返り、その方が望む以上の嚴重なる裁きも致さにやならぬ。」

「成る程博學な判官様、どうだ、ヂェウ、成る程博學な判官様だ。」

「それぢや先方の望どほり、證文の三倍で、其奴を許してやります。」

「その金は即ちここに。」

「控へい、ヂェウは飽くまで掟どほり、國法どほりに裁き遣す。急くには及ばぬ、控へて居れ……やい、ヂェウ、科料の外は何物たりとも取立つる事は罷成らぬぞ。」

「どうだ、ヂェウ、成る程公平な判官様、成る程博學な判官様だ。」

「いざさらば、肉を切取る準備致せ、但し血を流す事は罷成らぬ、まつた胷の肉一斤の外を切取る事は相成らぬぞ。若し聊かたりとも分量相違いたすに於ては、よしや分釐の輕重たりとも、いやさ、髮の毛一筋の相違たりとも、秤皿の上に生ずるに於ては、その方の命は無いぞ、そ

ちが家財は悉くヴェニス^の國庫に没收いたすぞ。

「今ダニエル様、今ダニエル様、どうだ、もうかうなつちやあ、ぐうの音も出やあしまい、ざまあ見ろ。」

「何とて、ヂュウは躊躇致すぞ、償を取らぬか、^{シヤ}元金だけを取つて、お暇が戴きたう御座りまする。」とくより準備致して居る。即ちこれに、

「ああいや、場所にこそよれ、法廷にて、一旦受取らぬと申せし上は、彼には飽く迄も掟どほり、證文通りの償のみを受取らせい。」

「ダニエル様、も一つおまけに、ダニエル様、おいヂュウ、とんだ好い話を教へてくれた、禮をいふぞよ。」

「すれや元金だけでも受取る事が出来ませぬか、^{シヤ}償の外は一切協はぬ、命がけにて切取るか、どうぢや、^{シヤ}ちええ、この上はどうとも勝手にしやがれ、もう論判は無駄なこつた。」

「待て、^{シヤ}イロック、まだその方には御用がある、自儘の退席罷成らぬぞ、^{シヤ}ヴェニスの國法によれば、直接にもあれ、間接にもあれ、若し外國人

にして當ヴェニスの國人を殺害なさむと企てし事露見に及べば、その財産を二つに分ち、當の相手はその半を取り、半は國庫に没收なし、猶犯人の一命は偏に公爵の仁恕に任せ、何人たりともこの儀について異議を挟むを得ざるの定、その方が罪狀は正しくこれなり、直接にも亦間接にも、これなる商人が生命を奪はむとせし事明白なれば、その罪免るべくもあらず、この上は地にひれ伏して公爵のお慈悲をお願ひ申せ。」

「この方の心の汝等と異なるを知らせむため、願を聞く迄もなく、その方が一命は赦し遣す、扱、財産の一半はアントニオに取らせ、残る一半は當國庫に没收せむ、但し悔悟の實見えなば、科料ばかりにて差許さむ。」それは國庫に對する分、アントニオへは制限のとほり。」

「いやいや、赦免は望で御座らぬ、命も何もかも取上げて下さりませ、大黒柱を抜かれるは、家を取られるも同じ事、暮し元手の財産を取上げる位なら、命を取つて下さりませ。」

「アントニオ情をかけて遣す氣か、どうぢや、ア、憚りながら、公爵様始め御列席の方方へ申し上げます。シャイロックが財産一半を料料にて御免除あるやう、只管願ひ奉ります。又残る一半は、私當分の閒預り置き、かねてシャイロックの娘と結婚致して居る紳士に相渡したう御座ります。なほこの上に二ヶ條の願、……第一、シャイロックことかく御仁惠を蒙りましたる上は、只今から基督信者と相成りまするやう、第二には、死後の一切の財産を、件の娘夫婦に譲るといふ證書をこれにて認めまするやう、何卒御申し附け下されたく御願ひ申し上げます。」

「いづれも履行致さるべし。若し相背くに於ては免除の儀は相協はぬぞ。」
「シャイロック、異存は無いか、どうぢや。」

「異存御座りませぬ。」
「書記役、財産譲渡の證文を認めい。」
「何卒お暇を下し置かれませう。氣分が勝れませぬば、證文は後からお送り下され、宅にて調印仕りまする。」
「退席は差許すが申し付けたる事を違へ

まいぞよ。(坪内逍遙)

二二二 如意輪堂

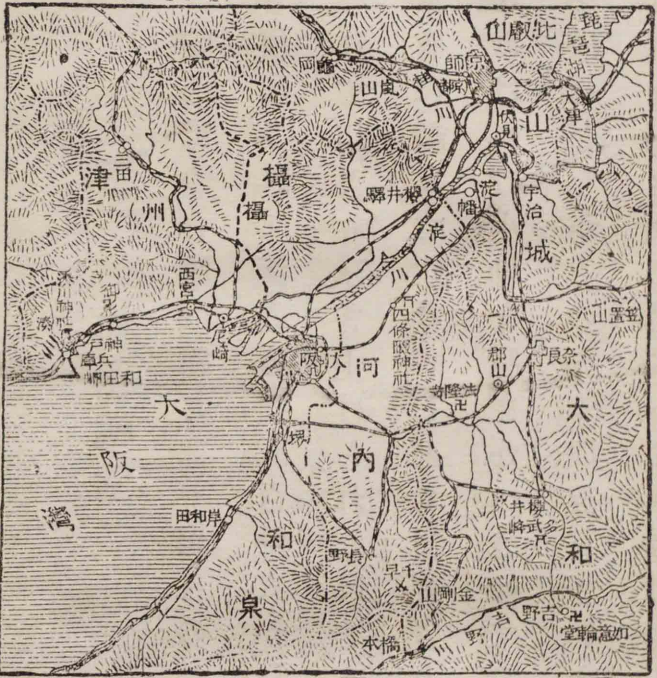
（一）
（二）
（三）
（四）
（五）
（六）
（七）
（八）
（九）
（十）
（十一）
（十二）
（十三）
（十四）
（十五）
（十六）
（十七）
（十八）
（十九）
（二十）
（二十一）
（二十二）
（二十三）
（二十四）
（二十五）
（二十六）
（二十七）
（二十八）
（二十九）
（三十）
（三十一）
（三十二）
（三十三）
（三十四）
（三十五）
（三十六）
（三十七）
（三十八）
（三十九）
（四十）
（四十一）
（四十二）
（四十三）
（四十四）
（四十五）
（四十六）
（四十七）
（四十八）
（四十九）
（五十）
（五十一）
（五十二）
（五十三）
（五十四）
（五十五）
（五十六）
（五十七）
（五十八）
（五十九）
（六十）
（六十一）
（六十二）
（六十三）
（六十四）
（六十五）
（六十六）
（六十七）
（六十八）
（六十九）
（七十）
（七十一）
（七十二）
（七十三）
（七十四）
（七十五）
（七十六）
（七十七）
（七十八）
（七十九）
（八十）
（八十一）
（八十二）
（八十三）
（八十四）
（八十五）
（八十六）
（八十七）
（八十八）
（八十九）
（九十）
（九十一）
（九十二）
（九十三）
（九十四）
（九十五）
（九十六）
（九十七）
（九十八）
（九十九）
（百）
（百一）
（百二）
（百三）
（百四）
（百五）
（百六）
（百七）
（百八）
（百九）
（百十）
（百十一）
（百十二）
（百十三）
（百十四）
（百十五）
（百十六）
（百十七）
（百十八）
（百十九）
（百二十）
（百二十一）
（百二十二）
（百二十三）
（百二十四）
（百二十五）
（百二十六）
（百二十七）
（百二十八）
（百二十九）
（百三十）
（百三十一）
（百三十二）
（百三十三）
（百三十四）
（百三十五）
（百三十六）
（百三十七）
（百三十八）
（百三十九）
（百四十）
（百四十一）
（百四十二）
（百四十三）
（百四十四）
（百四十五）
（百四十六）
（百四十七）
（百四十八）
（百四十九）
（百五十）
（百五十一）
（百五十二）
（百五十三）
（百五十四）
（百五十五）
（百五十六）
（百五十七）
（百五十八）
（百五十九）
（百六十）
（百六十一）
（百六十二）
（百六十三）
（百六十四）
（百六十五）
（百六十六）
（百六十七）
（百六十八）
（百六十九）
（百七十）
（百七十一）
（百七十二）
（百七十三）
（百七十四）
（百七十五）
（百七十六）
（百七十七）
（百七十八）
（百七十九）
（百八十）
（百八十一）
（百八十二）
（百八十三）
（百八十四）
（百八十五）
（百八十六）
（百八十七）
（百八十八）
（百八十九）
（百九十）
（百九十一）
（百九十二）
（百九十三）
（百九十四）
（百九十五）
（百九十六）
（百九十七）
（百九十八）
（百九十九）
（百十）

安部野の合戦は、霜月二十六日のことなれば、渡邊の橋より堰落されて、流るる兵五百餘人、かひなき命を楠木に助けられて、川よりひき上げられたれども、秋の霜、肉を破り、曉の氷、膚に結んで、生くべしとも見えざりけるを、楠木情ある者なりければ、小袖を脱ぎかへさせて身を暖め、藥を與へて疵を療ぜしむ。かくの如く四五日皆いたはりて、馬に騎る者には馬を引き、物の具失へる人には物の具を著せて、色代してぞ送りける。されば敵ながらその情を感ずる人は、今日より

後、心を通ぜむことを思ひ、その恩を報ぜむとする人は、やが

て彼の手に屬して、後
四條繩手の合戦に討
死をぞしける。さても
今年兩度の合戦に、京
勢むげにうち負けて
畿内多く敵の爲に侵
し奪はる、遠國また蜂
起しぬと告げければ、
將軍、左兵衛督の周章、

ただ熱湯にて手を洗ふが如し。今は末末の源氏、國國の催勢



(一) 河内國北河内郡

(二) 八月の藤井寺合戦、十一月の吉安郡野の合戦

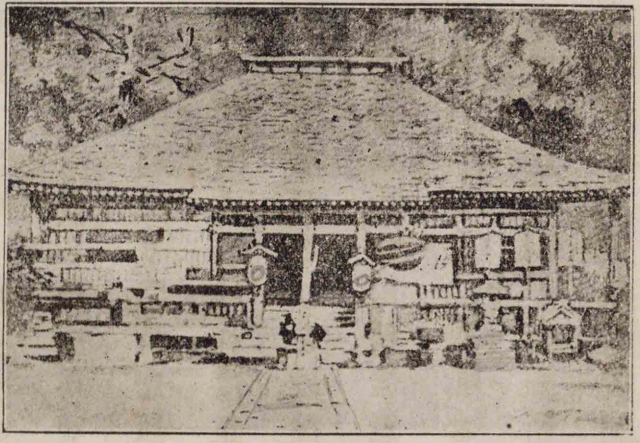
(三) 足利尊氏、河直義

などを向けては敵ふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直、越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國・中國・東山・東海二十餘國の勢をぞ向けられける。

京勢雲霞の如く淀・八幡に著きぬと聞えければ、楠木帶刀正行・舍弟正時、一族うち連れて、十二月二十七日吉野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、父正成、佗弱の身を以て大敵の威を碎き、先朝の宸襟を安め參らせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻めのほり候間、危きを見て命を致す所、かねて思ひ定め候ひけるかによつて、遂に攝州湊川にして討死仕り候ひ畢んぬ。その時、正行十一歳に罷り成り候ひしを、合戦の場へは伴はで、河内へ歸し、死残り候

はむずる一族を扶持し、朝敵を亡ぼし、君を御代に即けまゐらせよ」と申し置きて死にて候。然るに正行・正時、既に壯年に及び候ひぬ。この度、我と手を碎き合戦仕り候はずば、かつは亡父の申しし遺言に違ひ、かつは武略のいひがひなき謗に落つべく覺え候。有待の身、思ふに任せぬ習にて、病に冒され、早世仕る事候ひなば、ただ君の御爲には不忠の臣となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候間、今度師直・師泰に驅けあはせ、身命を盡し、合戦仕つて、彼等が頭を正行が手に懸けて取り候か、正行・正時が首を彼等に取りられ候か、その二つの中に戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度、君の龍顔を拜し奉らむために、參内仕つて候」と申しもあへず、

如意輪堂



如意輪堂

涙を鎧の袖にかけて、義心その氣色に現れければ、傳奏いまだ奏せざる前に、まづ直衣の袖をぞうるほしける。
 主上、乃ち南殿の御簾を高く捲かせて、龍顔ことに麗しく諸卒を照臨あつて、正行を近く召し、以前兩度の戦に勝つことを得て、敵軍を屈せしめき、叡慮まづ憤を慰する條、累代の武功かへすがへすも神妙なり。大敵、今、勢を盡して向ふなれば、今度の合戦天下の安否たるべし。進退度に當り、變化

機に應ずる事は、勇士の心とする所なれば、今度の合戦手を下すべきにはあらずといへども、進むべきを知つて進むは時を失はざらむが爲なり、退くべきを見て退くは後を全うせむが爲なり。朕汝を以て股肱とす。慎んで命を全うすべし。と仰せ出されければ、正行、頭を地につけて、とかくの救答に及ばず、ただこれを最後の參内なりと思ひ定めて退出す。

正行・正時・和田新發意・舍弟新兵衛・同紀六左衛門・子息二人・野田四郎子息二人・楠木將監・西河子息・關地良圓以下、今度の軍に一足も引かず、一所にて討死せむと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に參つて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に各、名字を過去帳に

書きつらねて、その奥に、

かへらじと豫て思へば、梓弓、

なき數に在る名をぞ止むる。

と、一首の歌を書きとどめ、逆修の爲とおほしくて、各、鬢髪を切つて佛殿に投入れ、その日吉野をうち出でて、敵陣へとぞ向ひける。(太平記)

二二三 戦争の結果

戦争の結果は正義の確定である。蓋し總ての國民は、實に戦争に依りて最も明確にその文明史上の階段を定め、世界に於ける地位を決するものである。雄健にして勤勉、高貴に

して優秀なる國民は、此の階段の上に高き地歩を占め、従つて大なる活動の範圍と、大なる支配權とを得る。之に反して、懶惰・劣等なる國民は、それに相當する報を受けざるを得ない。かくして戦争は、總ての國民の、其の時代時代に於ける優劣を定める最も鋭敏なる標準である。總ての國民に、其の優越の度に従つて、適當なる階段と地位とを與へる正義の秤である。爛れたるを斷去り、腐れたるを切捨てる神の劍である。人類無限の文明史的向上の健闘に堪へぬ、一切の廢頽・衰朽・毒惡の國民を枯葉の如くに振ひ落す秋風である。

戦争が正義の秤である、神の劍であるといふことは、無論、腕力・獸力・暴力が眞に正義であり、神であるといふ事ではな

い。蓋し戦争は決して單に腕力沙汰ではない。腕力強き者のみが戦争に勝つが如く思ふのは、戦争の真相を知らぬものである。腕力と云ふ點に於ては、矮小なる我等日本人は、長大なる歐米人・支那人に決して勝るもので無い。若し腕力のみが勝敗を決定するものならば、我等は永遠に戰敗者の運命より脱することは出来ないかも知れない。

戦争成立の條件、即ち戦争をして始めて可能ならしめるものは、實に義勇奉公の心である。此の道義的・英雄的精神なくしては、戦争に勝つことは愚か、戦争そのものが既に不能である。私欲・私情を超越して、偏に上に仕ふるの心に燃えずして、大戦争に勝利の光榮を得る事は全然不可能である。

されば勝敗を決定する最も重大なる要素は、實に道義的精神である。

而してその第二の要素は智力である。或は近世一切の進歩せる科學を應用して、金城湯池と固めたる要塞を攻め、或は百萬の大兵を蜿蜒數百里に互りて動かすに當つては、殆ど吾人の想像も及ばぬ、優越透徹、緻密精細なる智力に依らなければならぬ。而してかかる智力の必要なるは、獨り軍に將たる者のみに限らない。一艦を動かし、一飛行機を操縦し、一隊を指揮し、一砲を操るにも、智力はその缺く可からざる要件である。

これに加ふるに、軍事資金即ち金力が戦争の根本的條件

たる事は、今更言ふまでもない。ナポレオン嘗て人に戦勝の秘訣を問はれ、一も金、二も金、三も金と答へたと云ふ事である。然るに、金力即ち一國の富力は、畢竟國民平時の勤勉努力と、その智力との結果に外ならぬ。

かくして戦場は、實に人間一切の力の發揮せられる所である。一國國民が其の全力を集中する焦點である。かくして戦争の結果は、最も詐なく飾なき國民の實力の評價である。若し人類の間に戦争がなかつたならば、既に向上、猛進の意氣を失つて、爛熟頹廢せる國民が、その一度占め得たる地步の上に立つて、先進國といふ美名、いな虚名の下に、居常徒に倨傲尊大、永く天下の權を私するであらう。而してかくの

如く爛熟・頽廢せる國民の支配の下に、一切人類も亦遂にその向上・猛進の意氣を銷磨し去らざるを得ないであらう。されば戦争は、獨り神の正義の劔であるばかりでなく、また實に向上の鞭である。懶惰豚の如き人類を驅つて、崢嶸の阪路を踏登らしめる筈策である。

人類は實に戦争に依りてその總ての能力を發揮し、その精神を砥礪し、その自然性に鍛鍊・陶冶の工を加へて來た。人類のうち、最も麗しく、最も貴く、最も善きものは、總て戦の中より生れ出たものである。日本の精神の中、最も貴く麗しきものは、佛教でもなければ、無論また儒教でもない、實にその武士的精神である。而して此の高貴なる武士的精神はそ

の名のこれを示すが如く、實に戰場に生れたものであつて、決して坊主や腐儒の云ふが如く、印度や支那の教の生んだものではない。佛教・儒教の武士的精神に及ぼせる感化は、何處までも感化に過ぎない。精神そのものはこれら印度・支那の教より獨立し、日本固有の精神を根柢として、劔戟の閒より生じたものである。武士的精神、これ實に我等が國民的精神の最も麗しい劔戟の火花であり、その最も強い矢叫の反響である。

純潔・崇高にして、後人の摹倣を許さぬ彼の燦爛たる希臘文明は、實に戦の子であつた。箇人としては希臘人はオリムピアにその力を競ひ、その詩才を競うた。而して國內の都市

(←) Persia (→) Soorabaa. (⇒) Plato.

は互に鎬を削つて、絶えずその優越を争うた。此の如く戦の中に鍛錬、陶冶せる力を以てこそ、西暦紀元前四百餘年の昔に於て、小なき希臘國民は波斯百萬の兵に對する事が出来たのである。希臘の文學、藝術にして、何れか戦争の中から生れなかつた者があらうぞ。而して希臘精神最高の産物であつた哲學、亦實にその例に漏れぬ。かの偉大なる哲學者ソクラテースの逸話として傳へられるもの、その多くは戰場に於ける逸話である。彼は戦の間にその哲學的精神を練つたのであつた。而して世界第一の哲人プラトンは、哲學的修養を以て武士的鍛錬の基礎としてゐる。鷹の如く鋭き眼、鐵の如く堅き意志、疾風、迅雷の如く神速にして、しかも正確誤た

ざる判断、而して巖石をも碎かむ斷行の勇氣は、これ實に戦争に依つてのみ得べき修養である。(鹿子木員信)

二四 日蓮上人

世に英雄、豪傑とだにいへば、軍人、政事家などに限る如く思ふものあれど、こは甚だ誤れり。軍人、政事家の事業は表面は如何にも派手なれども、唯力づくにて敵を亡ぼし、國を取り、或は時運に乗じて政權を掌握するに過ぎず。謂はば開口のみ廣くして、奥行の淺き生活なり。さればその事業は、その當時こそは天下の耳目を驚かせども、後世に傳はりて永く人類を支配すること能はず。この點に於て、宗教家の仕事は

世に並びなく大いなるものなり。釋迦・基督・孔子等は、その當時にては眇たる一箇人に過ぎざりしが、その勢力は數千年後の今日に隆隆として盛なるにあらずや。印度・羅馬は既に亡び、支那歴代の變遷數ふるに遑なき程なれども、佛教・基督敎・儒敎は依然として人心を支配せり。

日蓮上人は日本宗教家の中にて第一等の人物なり。嘗に宗教家として第一等の人物なるのみならず、單に一箇人として見ても、その人物の偉大なること、古今殆どその比を見ずと謂ふも溢美にあらざるべし。安房の漁師の家に生れながら、稚きときより宗教改革の大願を起し、京都・奈良、及び關東の諸國に歴遊して、佛法はいふに及ばず、神道・儒學一とし

* (一三六—一三五)

て通ぜざることなく、殆ど天下の知識を學び得たる後、茲に法華經を以て佛教の極致と證悟し、當時流行せる諸宗派を攻撃して、法華宗の一派を開けり。素より天下に一人の身方もなく、四面悉く法敵なる中に、この新宗派を宣傳して、大膽にも、眞言亡國、律國賊、念佛無間、禪天魔と喝破せり。しかもこの新宗派を唱へたるは、念佛者・禪宗信者等の充滿せる鎌倉の眞中にてありしかば、執權北條氏を始として、諸宗の僧侶は言ふまでもなく、鎌倉中の信徒皆舉りてこれを迫害せり。日蓮、些かも臆し恐ることなく、法華經の爲に命を捨つるは、砂に黄金を代ふるが如しとて、益、その敎を弘めたり。彼はこの爲に住所を逐はるること二十餘度、或は暴民に

*相模國川口村字
片瀬。今の龍口
寺のある所。

夜襲せられて庵室を焼かれ、或は法敵に要撃せられて眉間
を割かれ、或は弟子を殺され、或は檀越の所領を召上げられ、
或は伊豆のはてに流され、佐渡の島に追ひやられ、或は龍口
にて首斬られむとし、打撲刀創身に絶ゆることなし。かくの
如き迫害に遇ふこと前後實に二十年、されど風大なれば波
亦いよいよ大なるが如く、少しもその當初の志を枉げず、身
命を塵芥の如く輕んじ、偏に法華經の眞理を弘通して、天下
を救はむとせり。その事蹟を思ひやれば、心も言葉もなかな
かに及ばず、實に人間業ならず見ゆ。法華の宗旨如何は措か
む、その宗祖たる日蓮の人物は實に萬世の龜鑑たり。

（高山樗牛一樗牛全集）

二五 櫻 諍

主人「これはこのあたりの者でござる。この頃はいづ方も花の盛りぢ
やと申すほどに、花見に参りたう存ずれども、暇がなさ、参ることも
得いたさぬ。最早、暇になつてござる程に、今日は花見に参らうと存ず
る。先づ太郎冠者を呼出し、申しつけう。やいやい、太郎冠者あるか。」

シテ太郎冠者「はあ、アト、居たか。シテお前に居ります。」

アト「汝を呼出すこと、別のことではない。この頃は方方の花盛りぢや
といへども、暇がなさ、花見に行くこともならなんだ。最早、暇になつ
たほどに、花見に出でうと思ふが何とあらうぞ。」

シテ「これは珍しいことを仰せられます。この頃は櫻の盛りぢやと申
す程に、櫻を御覽ぜられるとあれば尤もでござるが、珍しからぬ「はな」
を御覽ぜられて、何にさせらるる。」

アト「いや、おのれは何事をいふ。櫻も花も同じことぢや。」

(一) 拾遺集、紀實之
の歌。

「これは頼うだ人とも覚えぬことを仰せらるる。左様に仰せられ
たらば、人中で恥をかかせられる。身どもは苦しうござらぬが。
「して、汝がその様にいふには仔細があるか。
「なかなか仔細こそござれ、はなが見させられたくば、私が「はな」を
見させられい。他所へござるまでもござらぬ。
「いや、おのれは言語道断のことをいひ居る。おのれが面な鼻と
いふ。花といふは別ぢや。
「さうではござらぬ。歌などにも櫻とは詠まれたれども、はなとは
詠まれませぬ。
「なかなかでもないことをいひ居る。その歌を詠うで聞かせい。
「詠うで聞かせたならば、肝を潰させられう。
「急いで詠め。
「心得ました。櫻散る木の下蔭は寒からで、空に知られぬ雪ぞ降り
ける。これは何と。」

(二) 平忠度の歌。

(三) 新古今集、後鳥
羽良御製。

(四) 同上、西行の歌。

(五) 今はさながら花
も雪も、皆白雲
の上人、櫻かざ
しの袖ふれて、
花見車暮るるよ
り、月の花よ待
たうよ。(論曲小
題)

「此方にも花といふ歌がある。
「さうば詠うで聞かせられい。
「行きて木の下蔭を宿とせば、花や今宵のあるじならまし。」
「この方にもまだござる。櫻さく遠山どりのしだり尾のながなが
し日もあかぬ色かな。」
「それなら此方にもある。吉野山去年のしをりの道かへて、まだ見
ぬ方の花を尋ねむ。」
「それならば此方には諸にござる。
「諸へ、聴かう。
「櫻かざしの袖ふれて。」
「一段の諸諸ふ致し様がござる。やい太郎冠者、花見車暮るる
より、月の花よ待たうよ、月の花よ待たうよ。」
「はあ、これでつまりました。
「總別何も知り居らいで、むざとしたことをいひ居つて、某と競合

ひ居る。彼方へうせい。
シテ、はあ、ア、い。シテ、はあ。 (狂言節に據る)

校訂新撰國語讀本卷六終

大正十年十一月十四日 校訂再版印刷
大正十年十一月二十五日 校訂再版印刷
大正十年十二月三日 校訂再版印刷
大正十年十二月六日 校訂再版印刷



著者 相續者 補修者 補修者 印發行兼者

訂校	定價	大臨	卷一より
新撰國語讀本(全十册)	各金四拾錢	止時	各金六拾八錢
卷一より	各金五拾參錢	年定	各金五拾六錢
卷四より	各金五拾參錢	度價	各金五拾四錢
卷八より	各金五拾參錢		
卷九、十各金參拾貳錢			

故佐々政一 佐々政男 大町芳衛 武島又次郎 杉敏介

東京市神田區錦町一丁目十番地 株式會社 明治書院 取締役社長 三樹一平

發行所

東京市神田區錦町一丁目 振替貯金口座東京四九九一番

株式會社 明治書院

電話神田二三九八番

